

詩國

小觀



浩々歌

馬子才

浩々歌天地萬物如吾何。用之解帶食大倉。不用拂枕歸山阿。
浩々歌天地萬物如吾何。風原狂死泪羅水。夷齊空餓西山坡。
丈夫犖犖不可羈。有身何用自滅磨。吾觀聖賢心。自樂豈有
他。蒼生如命窮。吾道成蹉跎。直須爲弔天下人。何必嫌恨
傷丘軻。浩々歌天地萬物如吾何。玉堂金馬在何處。雲山石
室高嵯峨。低頭欲耕地雖少。仰而長嘯天何多。

啓上

東京も若葉の部と相成候、綠陰四草勝花時の句真に不欺我
候、逗子邊は目下薔薇満開にて不日山百合の季節と可相成、
芳事は却て夏期に多きか如く候。

來論に従ひ何か老兄御参考の爲め申上度候得共、別に是と
と申すとも無之唯だ文學も決して常識を離るゝものに無之
と存候間此邊御賢考相願度存候。

詩とか美とか抽象的の話は小生には一向感心出來不申候、
文學も到底人事の一片として可觀之候、世には文學者として

胸中一點の主張無き人も有之、彼等も應聲蟲若しくは社會の貯音機として些少の價値は可有之候得共小生が老兄に希望する所は此外に在り。

何時もながら妄論、偏へて老兄の之を妄論せんとを願ふ也、早々不一。

五月二十一日

角田老兄

猪一郎

浩々歌客に寄す

あめの下にはらびくにか、

吾皇のめくみうるははぬ。

難波のあしのかりねだに、

なま〜よしや去年ごとし。

むかしおぼゆるとよとみの

大城のあとのゆるぎなき

その雄心をこゝろにて

日々にたにざるふでのつか。

咲くやこの花ふでのはな

なにはわたりに春わりと

津の國ひとも世の人も

君によりてご知りぞめし。

されどこゝろは冬こもり
たゞ宵々にあくがれて

たをるはらづくしら雪の
ふじの裾野のふるさとの
家居たづねてさまよひて
葉ひろくま櫃たつかをを
今かたゝくとたゝすめば
われをおどろく夢あはれ
さすかにをしきその夢を

けふよりあだになしはて、
旅にもおやにかしづくを

君は今こそつげたまへ。

あはれうれしといはひてん
とはにさきくことほかん
うさもつらさもけふよりは
君か胸にしいるえねば
ますらをこゝろいやたけく
みやびこゝろもいやまして
いよ／＼ゆうにさわやかに
歌ひいづらめ君こそは。

東京にて

稻村真里

題して詩國小観といふ、所謂小説に似たるものあり、所謂韻文に似たるものあり、所謂紀行に似たるものあり、所謂嘖語に似たるものあり、唯だ吾が一片の情想録のみ。」

集中多くは曾て國民新聞紙上に録せるもの、一家言の如きは大阪朝日新聞より抄せるものなり。

風塵役々、自家の憶念を記せんが爲に、特に蘇老の來書と親友真里子の歌とを巻首に掲げたり。

詩の國、廣し、詩の國の首都、遠し、吾は讀者に
依て更に前途の美しき風光を觀んことを欲す。

庚子地久節日於浪華

浩々歌客

目次

老 天	一
霞浦一瞥	二四
夜半逍遙	一五〇
ふくろふ	一五九
無 聲 聲	
一、山茶花下	一七
二、籠の虎士	一七

明暗

二〇五

田園雜興

一、彼の處

二三

二、家庭眷屬

二五

三、鷄

二七

四、蟻

二九

五、童僕

三一

六、糖眼兒

三三

七、妻

三五

八、故郷

三六

春魂秋夢

一、題壁

三六

二、曉

三〇

三、春愁

三〇

四、夜

三〇

五、秋と詩人

三〇

花下醉翁

三三

山のたより

三三

富士山を憶ふ

三六

滑稽時代

雙燕偶語

一家言

一、大文學と人

二、派華青年文士

三、詩人ホウソンに就て

四、青年文士の思想

五、青年文士と社會

六、文學の平凡化と氣概の缺乏

興亡と詩人

雲濤

三〇七

三〇三

三〇〇

二九九

二九七

二九三

二九〇

二八七

二八四

二八〇

漢詩目次

文園

春感

湖上落雁

丙戌新年

海樓望鄉

梅花

梅花

寄懷米山梅聲在米國

倚劍長歌

滄浪聲

姑蘇城外

送天因西村子俊之金陵

浩々歌

目次終

詩國小觀



浩々歌客著

西の方より南に低れゆく富士の山勢、蜿蜒り々々て丘陵を成せる處
奔湍岸を嘴み岩に激して急流長へに絶ゆる富士川に傍ひ、壑深く

崖高く山重り水曲りてさながらコロポックル人種の住みたらんかと
 覺ゆる自然の別寔區、湫窪と名けたる山谷の部落あり。
 孤村を行き盡して平野開け、薙蕪青々として疊を敷きたらん如き路
 傍に、尖塔一基聳立てり、高さは三十尺に近く、周圍は二百尺に
 餘り、繪に描きし埃及の金字塔に異ならず、全塔層々重なりたる頑
 石もて成り、大なるは白の如きものより、小さは拳ほどのものに
 至り、稜あるもの、圓きもの、石理疎鬆なるもの、牛の臥せる如き
 もの、色綠潤あるもの、人の如く立てるもの、糸々として疊まされた
 るなり。

時は五月の某日、此塔の中腹に祭壇据ゑられたる摩利支天の石像を

祭るとて、村の老若はいふもさらなり、近き水の村山の郭より、杖
 に縋れる翁嫗、脊に負はれたる兒孫、娘の紅粉に装ひて人目奪くべ
 く盛衣着けたる、壯年の巾冠して隊をなし手を組みたる、その心あ
 るもなからんも、賽錢投げて拜するもの雲の如し、この群集に歡樂活
 らむとて、所在の香具師、機鏡師、歌祭文、聲色種々の小賈人争て
 肆を張り、招牌を掲げ、競うて客を呼ぶなる。
 印度の山中にて捕へたる樽より太き大蛇、飛驒の溪間に生れたる人
 面獸身の怪物、山雀の技、猿の藝、代は見られてからの事と高らかに
 叫べば、此方には戦争の傀、備、兵士の影畫、獅子舞の滑稽、祭
 文の物語、推しつ推されつ肩摩の雑踏をさしまねさつ。油紙の日暮

の幾多立ちならびたる下には、菓子を賣り、玩具を賣り、扮装具を賣り、繪畫を賣るもの、蒲席を鋪き牀閣を安き、團粉を列べ酒を酌み魚鮓をつくり、油鮓を煎るもの、壇上高く演説して藥術るもの、調おかしく歌ひつゝ「讀賣」を沽るものなど、その盡し得る限りの方便もて、言ひ得る限りの口辯もて、各その勞力の償を得むとぞ努むなる。

賽詣の群集は、夢にだに人間の消息知らざるべし黙々の摩利支天の石像に拜跪して、そが應驗の顯彰なるを語り、塔前の賽箱に投ぐる錢貨の償もて、現在未來の運命を福せんことを願ひ、さて後積日の生計に勞れし情懷をば、首を延べて相待てる歡樂の供給者に頼りて

慰めんとすらむ。

かくして天幕の裡には濁聲の歌高く、躍るが如き舞踏開かれ、簀屏の陰には山菜野肴の酒宴催されて、おぼつかなき絃の音も湧き、あやしげなる裙釵の影も揺ぎ、酔ひて狂ひて後には躬に前後を知らず夢に入るもの、笑みて樂みてさて徐ろに歩み去るもの、各そが歡樂に嬉しみ興じて、路遙かなる浮世の旅の一休憩、沽りたるものは財囊の底重うして、終日の勞作その報酬あるに満足し、買ひたるものは胸の中に快樂を宿らせて閑時の榮華に満足し、さらに生活の路に啓行つものもあらん、家庭の平和なる團欒に返るものもあらん。報酬の一半を爺嬾妻子に與ふるものもあらん。親に話し兄弟に語りは

た情人に語りて、和樂の一部を分つもあらむ。

限りあるの日に限なき興も盡くべし。買ひしものは去りぬ、沽りしものもまた去りぬ。詳集の去りし跡は、さながら疾風暴雨の歇みたる後の如く、日を蔽ひたる油團は裂かれ、客を招きたる簀はちぎられ、竹皮、經木、繩片、碗皿瓶鉢の碎片、饒餘の食品など、許多の犠牲は、紛々として戦場の屍の如く散亂し、狼藉して遺てられありありし繁華は刹那の夢の如く消え失せ寂寥たる氣象は、冥茫の裡より平郊の上に現はれ、黄昏の景靜に穩かに忍ぶが如く、踟然たる夜の色に暮れゆけば、獨り黒く茂りたる青葉の間、曲りたる小山の峽を透りて、たどくしくもはのかなる家々夜話の動響のみ、微に風

に遞られて、巨人の如く立ちたる尖石塔の邊に通ふ。

美しき女神の夢より醒めし眸子の如く、深くも遠き碧霄の一方に、一點の明星ばつと現はれ、やがて二點三點空色黒くなるまゝに千點萬點さらめき出たる衆星は、歴劫限りなき永遠の愛と崇嚴との冒し難き光芒をば、運命毀譽禍福ある生活の働の須臾止みたる夜の人寰に投げて、言はず語らざる暗中の尖石塔を、淡く朦朧に照し出す。夜の聲その邊に訪れ、夜の光その面に照りて、靜に立てる尖石塔は終古に日に炙られ雨にしめりて、苔蒸し葎に封じられつゝ、そが過去の縁を意はさざる乎。秘密はその石の底深くも藏められて、竟に人に語られざる乎。

第一

清く淺き小流にわざと架けたる涼榻に、澁團扇うごかしたる手を休ませ、丈高からぬ軀に着けたる新しき輕衫の襟開きて、肉つぎ豊かなる白き胸を吹かせつ、清く潤わりて夢る如き眸采に、照り渡る月をながむる少女あり。身を斜にして榻下の水聲の嗚嚚く如き音を聞かんとすらん、美しき襟首を月影にさらして打傾きたる、さながら魂を天に奪られたる風情せる背より、柔かなる雙の肩をむづとばかり捉へられ、壓ひたる様にて願へれば、一箇の少年笑みつゝ立てり少女も月に背きて微笑みながら、

「誰かと思つてー、愕りするわ。」

少年は肩を捉らへしまゝ倒るゝやうに榻に踞け、月に晒せる少女の半面を覗きこみて、

「誰だつて？、今夜來いと云つたじやないか、定めて居るくせに。」

「おほゝ……わたしは今まで來ないから、もう來ないと思つてたよ、よく來てくれたね、」

「あたりまへよ、」

「嬉しいー、」

と言ひつゝ、少女は少年の身に倚りかゝりて、重さに傾さし少年の顔をながめ、

「おほゝ、眞面目な顔をしてさ、」

「眞面目もあたりまへじやないか。」と少年も少しく笑みつ、

「おまへが此村に來たばかりにおれは今まで爲たことの無い喧嘩もする、夜遊もする、兄貴から叱言をさくともある、堅物な辛抱な孝左は氣でも違つたか浮かれたしたなんて、押搦はれるのも誰のおかげだ、皆おまへが迷はせたからだ……そんなに迷はされたおれだもの、今夜來ないと思つたも無いもんだ。」

魂をその躰より抽きて少女の懷に捧げたりと見ゆ、少年の眸は月に光を放ちてちつと少女に對へり。少女は漣團扇の柄を雙の掌に弄ひながら、得意顔に負める所ある容なり。

「さう、わたしは濟なかつたね、おまへさんを其様にして、けれど

わたしが悪いばかりじやないわ、おまへさんが關はなさやあ宜いのだもの……だけれど……わたしももう長く此方に居るわけにも行かないで、明日は歸らなくちやならないのだから……わたしは嫌だけれど……今夜さうでもうおまへさんの定情は止さうか。」
といひて偷むが如く男の顔を見たり。男は少し激したるやうなりしが靜に顔を傾け、
「馬鹿な、今止さうなんて、止せるものなら初手から爲ない、笑はれたつて怒られたつて痴呆にされたつて關はないのだ、皆が種々な事をいふのは嫉妬でいふのだ、それをおまへが止さうなんて事があるもんか、明日歸るつてのは前からの話しで分つてる、それを角

にして止さうてのは嫌だからといふのか、家へ歸つたら約束のやうにするまでしやないか。」

男は木履を脱ぎて雙脚を清水に浸し、踞けしまゝ足の指先にて石礫を弄びつゝ空になりて少女の應を待つ如し。

「なんで嫌なもんかね、わたしや嫌じやないけども、おまへさんが皆に何の彼のといはれてなんて、わたしのおかげだなんて、嫌のやうに言ふからさ。」

と言ひ終りたる少女は、冷然としてさながら思ひ絶へたる如く、清みて天心に中せる月を睨むやうに仰ぎたるを、男は熟ら横さまに見入りてありしが、ふつくりと豊かなる頬の月に映じて白く涼しげに

形よき鼻の稍張りたる、薄くして紅なる唇のわぎと堅く結びたる、女の顔に何の表彰か見ゆけむ、やにわに抱きよせて小聲に、

「悪物！人をだまかして、……」

少女は抱かれたるまゝ唯微笑むのみ。流は細々として静寂の消息を私語さ、月は皎々として天の戸高く夜を守る。四隣遠からぬ家の戸に蚊遣火の名残も消ゆ々々て、烟に淡くかすみたる森よ林よ丘よ遠山よ、静に夢に臥たるが如し。

少女は心つきし容にて起ちあがりつ、

「あゝ遅くなつた、夜が更けたよ、もうお歸りな。」

言ひつゝやがてたち分れ、徐々彼方の流に近き夜視には黒く山の如

く見ゆる茅葺の家として行きしが、急に引き返して、黙坐せる少年の腕を捉らへ、

「孝左さん、宜いかへ、必定だよ、盟約を反古にすると聽かないよ」言ひながら、痺るゝほどに強く手を握りしめぬ。

少年は點頭さて、

「うむ、宜いとも大丈夫だ、おまへこそ忘れるな。」

月は何時しか妬雲に陰り、少年と少女との影も暗さに隠れゆさぬ。深けゆく夜半の天と地、人の世の外なる水の音、蛙の聲のみさざめたる。

第二

湫窪の村中、小山に傍ひて小松原と字せる南面の一區地あり、翠緑の色滴れんばかりの青松の柯、交へたる陰に茅屋一軒、孝左はその家の次男なり。

おのれ耕耘して食ひ織りて衣るてふ小農にて、その地の慣として少ばかりの紙漉きを業としけり。父母は夙く世を去りて、唯一の朴訥なる兄の手に成人り、朝の星を戴き夕の月を踏みて働くとは、まことに孝左が兄の業を助くる様を言ひ得たるものなり。世の人々がおのづから逸樂の趣味を持てるに倅しく、孝左は自然に勤勞の賦性を持てり。その勤勞は、奴僕の暮を冀ひ傭人の價を望みてなすとは異に、まことに勤勞をは樂みとも人の自然ともなせるやうにその身に

具へて生れたらむ如くなりき。人々その勞を臥床に慰めその憂を枕に解かむする間に、かれは勤勞を夢み作業を想ふ。夜は勤勞に明け、その日は勤勞に暮れゆく。しかもその心頭これが爲に苦しと思ふと露なきのみならず、もし苦しと思ふとありとすれば、その勤勞のなし難からむ折の無聊なる時にこそありしならめ。

世の人は利をもとめ名をわさりて榮華をたづぬる時、眞宰が設けおかれし自然の規矩を超えて、罪をとると水を飲むが如くなる時、孝左は勞働に移めて作業に安じ、自然にはげみ自然につとめ、給せらるゝまゝに食ひ與へらるゝまゝに衣る。物に求むるとなれば、醜の如き罪の杯を飲むと無く、事に荒むと無ければ、蝮の如き毒の針

に刺さるゝと無く、他に俟つところ無く頼むところなければ、落膽するとも懼るゝとも無し。悠々たる優かの晝なきが故に、耿々として眠られざらん憂はしき夜はかれの身に臨まざりき。

されば、よせてはかへし、回へしては寄するなる浮世の波に一葦棹さし泛べたるその舟は、暗礁淺瀬に乗りあぐる慮無く、さながら春の波濤々たる静けき海を渡りながら、寄邊の彼岸は何處なるべきかかのかれ自から知らざりき。永劫盡くとは見ぬぬ宇宙といへる大なる範圍の裡の、人實といへる世に、誰ぞ父と母との身よりかれを生みたるに任せて、勞して後に糧をば得るの方便に順ひ、鳥の林にその餌をわさり獸の野にその食をたづぬるが如く、水自から流れ山自か

ら青さが如く唯自然にして労働に自得せるなり。

孝左の運命の樹は、落りて消ゆといふ花無き爲に、その根は水の邊に蔓り、その枝は長へに露おかれ、食ひ飲み衣き臥して後醒めてまた働き、病來れば病み、死誘は、死したらむまで、小松原の松の小陰の茅屋に、山の禽、野の花ともろともに自然の生活をば續けたらむ。

鋤鋤とりて圃に出でさては紙漉きの業に勵むなど作業の舉動のいかゞしき外は、さながら木偶の如く石の如く無感覺のやうなるに、郷黨は何時しか變物の孝左と渾名したり。まことに郷黨は作業の外に感覺ある孝左を認めたるは鮮かりしなり。

兄は朴訥にて多く弟に似たれど、孝左の如くは作業に強からず、唯だ世に多かるべき好人なり。弟を愛するとは深くて勉はりつゝも、心を寛げ身を休めよなど勧め、鎮守の祭禮、農休みなどには幾許の費を與へて遊びにと促すとあるも、變物と稱へられたる身には、家にありて易げなる手業するが孝左の休養なりき。

かくばかり感覺鈍げなる男の痴漢なるべきかと疑へば眉濃く秀で、眼瞥昂がり、鼻柱透りて唇は緊りがちなる、顔の色さぬくしくして降采の黒く光あるは、際だちて風采を潔く視す。笑ふと少けれども、笑へば小兒も馴染まむ面影の、何れに人に嫌はるべき容貌にあらず。

春は朧ろに月霞み花夢の如き夕なりき。村にては際だてる家に祝事ありて招かれし兄の病めるに、代として強いられ、屈托氣に饗宴の坐に列りぬ。好める蕎麥切をさへ遠慮せるにも似ず、嗜まざる山麩をあくまで強いられ、やがて坐には得堪ぬで死せるが如く席の片隅に臥しぬ。幾時経たりけむ目醒めたる時は、客皆歸り盡し家内は舁の音のみ高く、戸鎖もせざる窓の格子よりぬるみ顔なる月の光朧ろに清く室に入りて、おのれの身は蒲團して被はれぬ。作業に鍛へたるたくましき骨格は、野に臥し山に寝ぬとも慮ふべきと無き人を、誰かは意注きて衣蔽ひたらむとだにも覺ぬず。起きて歸らむとせしがさすがに戸鎖をおのがまゝに開かむとの後めたさに躊躇ふ時、人の氣して、暗にも美しげなる少女の顔は傍に近よりて、優さしく私語ける聲もてかれを留めぬ。世にも異しき心地に應ふる言葉も出でず、黒き眸を動かして夢の如く凝視めしが、やう／＼にして今宵の款遇を謝し、さてはいたく酔ひ臥したる粗忽なと憶したる容にて言ふを、少女はほゝ笑みて、彼處に蓐あり臥したまへといひ、良久脚躡ひつゝ退き去りぬ。かれが、少女は此家の親姻にて此夕客を款待せる人なりと心つきしは良久の後なりき。

孝左の寝ねて歸らざりしは、此夕をもて始なりともいふべし。翌日は未明に起きてなほ消ぬざる星光の下、例の如く鍬肩にして團に行きぬ。昨夜淡黯き室に少女を觀て、その顔容のいと麗しきを知れり

その聲のいと優しきをも聞きたり。たゞ聞きたり觀たりといふまでにて、それを再び觀たし聞きたしとも思はざりしが、孜々として畦より畦を耕し青浪を疊みたる麥生の裡、笥笠を傾けて烟霞に浴せる此日、當面少女はかれの傍に來りぬ。

村に程遠からぬ青樹村の源吾の娘阿袖といへば、村人知らぬもの無き深山の櫻花、美しき評は漱窪の少壯にも知るものあり。されば阿袖が近き日農事の助手にとて端りなくその姻戚の家に来り居るを認めては、東家の子、西院の男、浮きたる心々に、此花の露に濡れむを願ひ、彼宵の宴はその人々に好き機を與へ、滑稽をいひ諧歌を唄ひて、外ながら此少女の愛を買はんとしわざと酔ひどれたる容に

もてなして臥たるもありき。されど淡く刷きたらむ如き眉の形美しく秋の水に似たる眸采清く唇の厚からず結びたる稍圓形なる阿袖の顔容は、何人にも心を留める様なく、訝しくも人々の變物と呼べる孝左をは圃に訪へるなりき。

阿袖は、長閑に春の日をうけたる笥笠を目ざし隴の細巡辿りゆき、水より清き眸采あげて呼ばんとせしが脚蹠ひ、笥笠の仰ぐを待てり淺黄色の筒袖布子に豊肥しき身軀被うて、阿彌陀に戴きし笥笠は、やがて裏をかへして淺黒く汗ににじみし顔に黒眸の光あるが、端りなく此方に向けるを、濡む眸采に昵と視て阿袖は笑みつ、輕き挨拶に昨夜の薄遇を謝び、その作業のいそしめるに慰藉の詞など言へ

ば、さすがにあたらけ忝おろき面おも地に應こた二ツ三ツするに、阿袖は傍そば近くより、
 蒔ま子の話はなしより世間の噂うわさ、はてはかれを讀よめ稱たへ郷黨きやうとうの賞あやづるとさへ
 告つげたり。されどかれは唯ただ々と點頭ちんとうさ、少しは笑わらひ少しは和やはらぎ、親
 しげに慕もはしげに言いふ阿袖の言葉ことばに比ひしては石佛いしぼつの如ごとく、意いわり味あじ
 ある情こころを解とかず、久ひさくして今いまさらに阿袖の爰こゝに來きしを關心くわんしんさしやう
 に、何なにの用もちにて圍はには來きしかと問とひぬ。

阿袖はその眞面まじめ目めなるに出いさん言葉ことばに困こませしが、はよと笑わらみて、お
 まりに出精しゅつせいなればせめては話談わだかましてなりと慰なぐさむふしもあらんとて來
 れりと、嬌羞はぢを帶おびてうち傾かけり。かれの眼まなこは黒くろき光ひかりに奇あしき色いろ
 て瞬まじろきぬ。

阿袖は青あおみし麥穗あやめやさしき指頭ゆびさきに挿いひながら、何をか言いはむとまつ
 さまなるを、かれはそは嬉うれしありがたしとばかり、頓とんとはへ無く、
 やがてはのそく哇うわをたどり、握にぎりしまゝの鍬くわの柄えを動うごかし初めて
 再び言いはず、人ひと悪わるく冷然れいぜんたるにはあらで、邪氣あやぢなき小兒こゝろの擧あげ止とみに
 髻まげたり。

兩個ふたりはかくて相分あひれぬ。美うしき女子むすめの優やさしき言葉ことばの露つゆに濡ぬれながら
 孝左たかざは阿袖の情こころを解とかず。阿袖はまた戀こひ慕もはるゝ萬衆ひやくしゆの掌てを拒こみ
 、この石いしの如ごとき無感觸むかんじくのかれに賣縁うりひり、幾度いくたひか訪まひては語り逢あひて
 は挑こむ。

郷きやうの少壯せうしやう等は初はめ阿袖と孝左と語かたらうを認まめても變物へんぶつと知られし人

の身に心かけざりしが、敷かさなりて兩個の親しげなるを見、漸次に嫉妬の情惱ましく、させるにもあらぬを私語さ傳へ、竟ては阿袖は變物男と瘧みたり、變物男が美人に惚れたりとの風聞、明らさまに孝左の耳にも入るやうなりぬ。

さすがに女の情ある言の敷重ね、情ある容顔の敷はのめくに依りては、容易くは鳴るまじき心線の端に何時しか夢の如くかすかに情韻を聴き得たるべけれ、おのればそを覺るほどにてなかりしが、衆口は忽焉として酔ひ臥せるものを醒せる如くなせり。情の谷の唯乾涸たる荒野にひとしきが、水の音遠く聞えたり。やがてその谷に流れこひやうに聞えたり、やがてその水はおのが情の谷に流れ來つゝ

あるを識りたり、今はた愛の泉涼々と眼前湧くが如く満ち充ちぬ。情の上には石よりも冷かなりし身、今は化して羊の如く親しげに順になりぬ。設置かれたりとしも無き心底の罘罘は除かれて心猿躍り意馬狂ひそめぬ、唯管自然のまゝなりし勤勞は、何の爲に働くやなぞわれから問を起して、俟つことあるの勞作となりぬ。爲にするに無く望とては世に置かざりしかれば、今一箇の美しき愛の神に對ひて事毎に舉動ふやうになりぬ。實なかりし衆人の言葉を實にして阿袖と離れ難き戀を契りぬ。

勞作に熱心かりしかれば、愛情にもまた深く切なり、雲烟にひとしく眼を過でしたる阿袖に對ひて今は荊棘の中に百合花を得しやうに

満腔の情を擧げて女に捧げたり。眠れる時だにも、愛のために心は
 醒め居たり。心の聲は静におのれながら愛の名を呼びぬ。
 阿袖はわが掌の花よ、わが天の月よ、また無く完全さものは他にあ
 らじ、われを抱けわが身を庇へ、汝の眸は櫻の花の替の色よりもな
 は艶なる脛に傍うて、春の水より温げなる、汝の齒は瓠の犀よりも
 美しく、香ゆかしき息通ふその紅の唇の隙より見ゆる。汝の髪
 は鳥羽の濡れたるよりも黒く豊かなる頬は嫩き花瓣の如く馨はしく
 艶あり。汝の手は柔かにて蕙の芽の如く圓らかに温かさ玉の如し。
 肌、脂凝つて雪より清らに、頸も胸も腹も脛も腿も、さながら名工
 の魂注ぎて作りたらしむ白玉の彫物の如く、汝の躰軀はわが胸に印

の如く刻まれたる、銀も金も珠も如何なる寶も、汝に換ふべきもの
 は世を重ねてもあらず。と、此聲胸に音づる時、かれの身は沖に浮
 きて、温かさ腕の肉その肉を抱き、香ばしき呼吸その唇に通ひ、嬰
 兒の搖籃に天地を夢にせるよりもなほ安く楽しくわれも無く人も無
 く、佛の國はこれかどばかり神の世とはこれかどばかり思へるなり
 落花あはれに泥にまみれ、雨細く風織く行く春を送り、若葉の緑樹
 々の梢に茂く、日の陰清うして麥漸く熟らむする頃には、孝左は情
 あり顔の人と化りぬ。阿袖の愛は一層深く、親姻の家に在るの期も
 既や盡きたるを、種々の口實もてなほ幾許の時を延べたり。
 されど終に歸るべき期は來りぬ。父母の招き頻なるに阿袖も口實の

方便盡きたれば、こゝに孝左と伉儷ふ相互の監約を固くし、證の表
とりかはし、涼棚の邂逅をしばし別の逢瀬とはせるなり。

第三

孝左は阿袖の言を天使の示現の聲とも聞き做して、將來の望は平明
の光のやうにその前に輝きぬ。夢に現に愛戀はかれをその掌に玩
びなぶるをわれから玩ばれなぶられ居たり。

若き郷黨は嫉妬の言を出す。かれは阿袖に弄ばれたり、阿袖はそ
の村にてはや相應の男を佳婿とするを約せり、いかで孝左をその
家に迎へむ。おはれ、正直ものは阿袖おまに欺かれたりと。この誘
惑の魔に賺かされず、ひたすら阿袖よりの消息を待ちぬ。程経たれ

と音信無し、湫窪と青樹とは一里に足らぬ道程なれど逢はねば千里
の程に等し、稍忍び難くなりて、一日も徒に過さるる 勞作を抛ち
或日のと青樹村にゆきぬ。方便して阿袖に逢ひ躍る心に情懷を問へ
ば、女は盟ひたる事の父母の氣むづかしさに後れたるを辯じ、此度
は互に家の許得べしと誓ひて分れ、孝左は歸るとそのまゝ明らさま
に兄に語りぬ。弟の舉動一變したるを訝りて阿袖との情交を豫て知
りたる兄は、おのれを助くる 勞をそれが爲に怠れると無きまゝさ
して咎めもせざりしが、今孝左が堅き決意に思ひ込みて阿袖と添は
んと請ふを聞き、何事にも優柔なる性として夙には應へかね、その妻
を顧みて如何に問ふ、妻は性情輕々しく言數多く、何事も領會早

さものなれば、孝左は正直に篤實に勤勉なる人ゆゑ、何處の家の婿
 となるも、好主人なるべし、況して阿袖の家は舅姑の外に累らふべ
 き家族とてなく殊には、相思ふたる情交にてもあればこは良き縁に
 てあらむとの判断に、兄は容易く思案定めて、入婿の費途及ぶだけ
 は負はむと諾したる、孝左の喜悅譬ふるにもの無し。
 阿袖もまた父母にその情をうち出で請へば、雙親は愛娘の語を聴き
 て驚けるまゝ良久黙せり。
 阿袖の家は富めるにあらねど、孝左に比しては優れて豊かなる生活
 せり。近村の富豪にて名主をも務むる某の、その村にある所有地の
 監理をなせる父は、稍才覺ありて世處には巧なるものから、妻との

間に男子數人ありしが皆天し、四十路に近くて子無き不幸を嘆ちた
 る時、最後に生れしは阿袖なれば、篠坂の觀音よ、白尾山の地藏尊
 よ、ゆづり水の不動尊と、知る限の神佛に祈願して成長の安からむ
 とを心に籠めて育てあげし愛娘、古の玉抱さし人の心よりも切なる
 に加へて、村に稀なる美貌なるに鍾愛一層深く、一家幾許の瑕疵欠
 乏は、娘の美貌にて蔽ひ隠されぬ。成長なるに隨れ、阿袖に頼りて
 將來の榮華となるべき、家門の後委ねむ佳き婿獲むと思ふにつけて
 わが娘の美貌は、そが家より數等優れ富みて且は系統ある人の子を
 聘するに充分の價值ありと信じ居たり、されば阿袖の芳期になれる
 をもて、その胸には四隣の富める家の子弟を數へ、娘に當ておのれ

等の中に置き見て、これかかれかと撰擇品評の寢物語、欲望は娘の容姿のために稍分を越わたるなり。今阿袖が口づからその願望を語るを聞きては、うち驚きつ、はては農の補助にとて湫窪に須臾なりと遣はしし無念を悔いぬ。孝左はもとより夫婦の意に協ひし聲にてはなかりき。

阿袖を兎や角賺しこしらへて、事を遷延し、日數経なば思ひ絶むと思ひしが、日夜に止まぬ阿袖の請求、困じはて、愛女の情を満さむには、かれ等の所念願望を犠牲とせねばならず、それを犠牲とせば家門の榮華は今より一層の望はあらず、老後の幸福も阿袖自からの行末も覺束なしと思へば、利害を説きて阿袖の意を翻さむとつとめ

父母のやがて選ばむ佳き人を迎へむに増すとあらじと勧めなだむるも、燃ゆる情火熾なる阿袖には、父母の言葉耳には入らず、過去の事はもとより、將來の譽も榮も戀の前には影見ぬす、たゞかのれと孝左と睦ましく樂しく濃やかに情語らふ幻影の往來のみ、父母の何かは許すべき様の見ゆるに堪へで、或夜孝左の許に走りぬ。源吾夫婦人して携れかへりしが、阿袖の心翻へし難く、母親の意まづ折れて娘の望協ふべく源吾に勸むるととなりぬ。かれ等の家門榮華に對する欲望と娘に對する愛情との間に幾らの葛藤を累ね、夫婦の中の涙となり争となり、やがて不動の御園となり法印の卜占となり、漸くに阿袖の願は許さるゝ際となりぬ。

早天の一角に雲をのぞめる如く、望月をまてるが如き孝左の相思は
 茲にとげられて、結繩の神は兩個の上に情の掌を下したまひ、程な
 く青樹村に人に羨まるべき新郎新婦と稱へられぬ。
 喜悅といふとは此兩個の爲に作られし文字、満足といふとはこの兩
 個の爲に言はれし言辭とも思はるゝ樂さには、一週二週さて一月は
 半歳となれるまで、唯夢の如く過ぎ去りぬ。
 さるほどに胸に溢るゝ前途の希望に充たされし孝左は農桑の業擔る
 となく、勤勞は變物と言はれし時よりも、一層増したらむ様に見
 て、人々の驚くまでに勵みたるが、世渡る術とやらに技倆と才藝と
 は缺けたり、巧に波瀾あらし世の海を漕ぎぬく手腕は乏しかりき。

舅たる源吾は、監理の田畑につきて、交渉ふべく進退さすべき事が
 ら數多なれば、屢々孝左に命じて處置さする事も少からず、さるに
 孝左は常に正しく進み正しく言ひ、表裡無く内外なく、唯爲すべき
 事をありのままに行ひ正しかるべきを正しく爲すがゆゑに、葛藤少
 き事の外は成効の満足を得たるは少し。おのれをもて他人と同じく
 視、他人の意思をおのれの陰なきにひとしく視て、兎の毫のささの
 露はども、人をもおのれをも欺き詐るとをなし得ず、おのれに思は
 ざるとは、口より出でず。實のみにて虚とては無きその性は、舅源
 吾が過去に爲し來れる方便とは所詮容るべき際にてはなかりき。
 虚實なくては劍道は學ぶも益無し、渡世もまた同じことぞと、名主

がさる武士より聞たるをまた聞ける源吾、それをば孝左に傳へて口癖のやうになりしが、孝左にはその虚實の判別を視ながらに施す術を知らざりき、虚實はまことにおのれを欺き人を詐る罪とやうに思ひき。さればやがて源吾は孝左を婿とはしながらも、おのが繼續者とはなし難く、阿袖の夫としても勿論劣れるものゝやうに感じゆくと深くなりぬ、術策をもて世を渡り臨機應變の知恵あらむものこそ人間の優者なりと信じたりければ。

人間會て苦たるものは無かりし孝左の胸にも、やうやく憂苦の影象は見初めたり。天地唯自由のみ世間唯放膽のみなりしその眼は、やうやく自由を妨ぐる羈絆、放膽を煩はすべし係累の生るゝを視き、

たゞ多少の羈絆多少の煩累は、阿袖との愛情にてさせる憂をも償ひゆくが上に、婿はそのゆきたる家の舅姑に順良に事ふべきもの、人はその行藏を軽らかにすまじきものと確固く信せるまゝ、その誠心は、舅姑の意に適はざるやうなりても、なほ家庭の平和は保たれしなり。されど、その意思を異にすれば比隣も參商となるは世の例なり。早晚舅姑と孝左とは將來に徑庭を生せむと自然の理なれば、源吾は孝左の才覺無きたゞ實男なるを補助とするに足らずとせるよりかのごと孝左の家にて働くべき作業は少くなりぬ。初は舅に隨きて出入したる名主の家にも地主の家にも、使はるゝと少き爲に行かずなりぬ。閑暇といふこの苦しさ身には、何事か耕耘の業の外に、

爲す事なくては堪へぬ孝左、折にふれてその意を阿袖に語りぬ。
 阿袖は孝左と相添うてより日を経るまゝに交情ますます濃かなるものから、父母の意向は翻て夫に疎くなりゆくを見て、敏き心に好き法もがななど思ふ。もとより掌上の珠玉とも育てられしその身は、世に矜重なるまゝ、父母に對しても我意を張ると多く、夫として孝左を待すにも愛情の切なるには似ず、外見は冷かなるやうに思はるゝ舉止もあり、それは父の性質の一分を受け居て、表裏虚實ありとやいふべき。孝左の作業の便をど語らふを聞きて、女の知恵ながらの思案、まづ父母と分れ住むべきを言ひ、やがてその所由を説き聞かして父母に寵を分たむとを請ひぬ。

取次に孝左にもものたらぬ感情出でし源吾夫婦、疎くは思へども愛しき娘の情には勝ち難く、さりとて孝左と同居せむは好ましからずなりし折柄、娘の請ふまゝに別居を許しぬ。
 孝左の考案にては、事情の許すべくば兄の家近く住いて、馴れし手業の紙漉させむと思ひしが、舅姑はまた阿袖をしかく離すことを望まず、阿袖も居村の家近さを望めば、その意に従せ、やがて遠からぬ地に小やかなる茅屋の家、建てあへず新夫婦は移り住み、建具鍋釜厨道具のそれぐも日ならず調ひ揃うて、茲に兩個は新しき生活の船路に上る。農桑の業の外にはなほさして定まれる作業もあらねどさすがに楽しき時を送りぬ。

但だ別居獨立して伉儷相對の境界となりしよりは、孝左の處世の道に拙きは著くなりぬ。正直廉潔なる夫と放心にて慎密ならぬ妻との行爲は、産業の増殖覺束なくて、源吾夫婦に經濟の上を煩はすこと繁くなりゆく。

郷黨の父老は新夫婦の新生活を祝ひ勵まし、孝左の愛すべき人格を讚め稱ふ、少壯は美しきかれ等の女神なりし阿袖と小松原の變物たる孝左との配遇を、世に訝かしく怪しき契なりと言ひ、新しき家に住みてよりは、なほ伉儷は長くは續かじとの後言、相互に嫉妬の言を詛へり。

孝左が阿袖を遇ふとさながら女神の如く明星の如く、阿袖が孝左を

待すとば、おのれの子の如く手中の珠玉の如く、孝左は何事にも妻に憑ひと深ければ、阿袖はまた夫をなにくれとなく愛しがるに、折々は拗ねても見する。世にこれはどの美しき妻はあらじ、世にこれほど信あり可愛き夫はあらじと、愛する趣は異なれど、情に深き淺きはあらず。

かくして婚姻の夕より二年の夏は來れり。孝左の兄は或日來りて種々の話説より弟のあらずなりて、事毎に不自由なる家業など語り、孝左は良き作業はあらずやなど問ひ出づるに、思ひあたりしやうに兄は手を拍ちて、良き儲利の口ありといふ。そは如何なる口ぞ、聞きたしといふ傍より阿袖もまた喜はしげに質すめり。兄は、例年富

士登山の旅客を宿して少からぬ利殖ある表口五合目の石室、此夏は業を休みてさるべき望者あらば低き賃にて貸すべしと聞きたりといふ。それは好き利途なるべし、人に先越されぬうち是非に望みたしと唯一に頼めば、さらば貸さむといふ人は、近き澱洲の某なれば、今よりついで一走行きて語り聞かむとて、信實なる元は出でゆきしが石室はなほ誰にも貸さでありし折柄、此相談容易く調ひ、阿袖も利殖あるとにてあらばと容易げに領きたるが、當時富士は女人堂を麓に置きて、婦女は其處より上方に登るとの禁制に意つき、少時にても離れ難き交情の戀心、遠き羈旅にてもあらむやうに憂はしくも思はれしが、得難き利殖途なりとおのれも知れば、よばくしと意を

奮ひぬ。かくて兄の周旋は貸借の事を理め、阿袖の願は源吾より幾許の資本を得、總て調度行李を具したる孝左は、吉日を撰みて白雲の山邊さしつゝ出で立ちぬ。片時も傍を去はいとつらき思なる阿袖と孝左も、浮世の波瀾に漂ふ身には、束の間の離別の憂きはなくてやあらむ。況して遠からぬ一日の旅程、思ひあまる折には歸り來むいと易しと知るものから、この別離いともつらく、さながら乳母に分るゝ小兒の如き心地するを、阿袖はさすがに装ふたる風情、離の辭も軽らかに留守は案じたまふなどて勵まし送りぬ。

第四

茫々たる滄溟と、浩々たる碧霄との間、ふりさけ見れば渡る日の影
 も隠れむ、照る月の光も蔽はれむばかりに、静に乾坤に懸れる白扇
 の高嶺、富士の山腹に神仙の家宅の如く五合目の石窟は立てり。
 五合目は所謂中道巡りの衝に當り、大滑澤、赤滑澤、鬼ヶ橋、天の
 浮橋、天狗岳、不動岩、執杖流の危路險道の古跡、はた岳頂劍ヶ
 峰に傍ひたる大澤を下れる處、巖石常に頽れ砂礫恒に飛ぶ鳴澤の難
 所を過ぎ、木の花澤、櫻澤、佛石澤など平らかなる砂地より砂振、
 穴室、不淨流しの澤、燕澤の棧道を経て、寶永山の洞穴、屏風岩、
 牡丹岩、臥龍石、蓮花石などを訪ふものは必ず宿を此に求む。
 石窟の高さは五尺に足らず、四方石を疊み積みあげ、中をば埒また

は梓の如く木を構へ、下は焦石の上に菴蓆を敷きたるのみ、床とは
 名ばかりなる十疊ばかりの室に、三尺の爐を設けて、懸けたる鐵瓶
 よりなほ黒く光れる自在竹はくすばり色に梁に吊られ、薄く汚れた
 る煎餅蒲團三四枚、桶、鍋、杓子、茶碗、鉢、飯櫃などさすがに一
 通り具はりて、一隅に横はれり。
 薪は三合目より下り落葉松の枯枝を拾ひ梢を伐りて擔ひ上げ、水は
 寶永山の深谷の殘雪または九合目の萬年雪を掬ひ來りて屋上に置き
 日陽に溶けて滴る雫を桶に漚め貯ふ、そを沸したる湯に煤氣たる番
 茶煮て、客に供する一杯の價八文、半ば熟せる米粥の飯、刀豆に似
 たる蔓草の實の富士豆と、名は佳けれと味ふべきものならず、味憎

の塊、梅干の數箇、鷄卵の少許、名高き價をもて道者の需に供ふ、孝左は此窟の主として刹那の生活ながら仙人道士にひとしく、變物と云はれし曩昔の容は此時の舉止に見ゆぬ。

初めての業ながら、調度の他に比べて具はりたると場所の好きとそ
の實直なる待遇とに依り、登降の人、中道巡りの客足絶えざれば、
その利もまた少からざりけり。

阿袖といへる北辰をその胸中の天に置き、總ての觀念の衆星は悉く
北辰の彼女にむかひて集注く、さればこの山住の作業に得たる利殖
をば如何に使はむかと思ふは日毎夜毎の心なり、青樹の村は紙を渡
くに便よからず、圃地多く預り耕して茶種蒔きて産業を起さむか、

はた田地多く作りて小作米の收穫に富を得むか、われ富まば阿袖の
幸はいふまでもあらず、われに疎く見ゆる舅姑も親しくなるべく、
貧しく生計す兄をも補助け得むなど思ひつ、希望は幸福と榮光とを
もてその面前に往き來ふなり。

寶永山の大洞穴より捲き起す黒雲の大風に躍りたちて磊塊たる石礫
木葉より軽く飛びて此小さき石窟を撲つ夕、鐵よりも冷たき蒲團に
包まれて熱き情を愛の神の阿袖に寄する。浩く涯無き蒼空に、皎月千
里の光かゝやき天地寂寞たる處、八荒を瞰せる鐵芙蓉が、靜に坐せ
る巨人の如く、さながら廣寒宮の天使と相語らふ時も、夢視る如き
降してその魂は里遠く阿袖の懷に通ふなる。

六月朔よりはじめて八月晦に終るべき富士登山の日數をかればかくして暮らしゆきつ、はや八月も半を過ぎぬ、俗言に孟蘭盆會の日を過ぎては、山荒れ易く暴風起りがちなりといひて、登るもの頓に少くなる例なるが、この年は天いそよく晴和のみ績き、山景色掬ひとらむほどの静かさ、多き道者の中にも、山氣に酔ひぬとて途より返りしは少かりき、されば盆後の山も賑はしきは異ならず。

その月もやがて盡さんとする廿六日、村に近き知人なる剛力は、伊勢の客五人を導きて登り來り、日既に傾ける頃かれの石窟に宿りぬ。裾野は取次に暮れゆきて淡墨色に暗く、村里の燈火、炊きの烟、濛々として見ゆつかくれつ、程なく雲湧き霧たちて、眼前に堪へられた

る滄海も、包まるゝやうに暗に籠められ、夕陽は億萬丈の光焰を長空に曳くかど見るまに、忽ち消ぬたる影は大嶽の全面を黒く染めたりぬ、夜は來れり、石窟に燈火は無し、落葉松のくねりたる柵櫓を爐に焚きつ、燃ぬたつ光に圍繞りて煖をとる主客の顔、時に明く時に淡く時に暗く相對うて語らふ、剛力權は毛だらけの脚を爐端に横へ「さうだつた、今夜あ廿六夜さまだ、お客さまあ拜みなさると宜し」言ひつゝ唯一なる戸口の方に歩み寄り、細目に開けて天うち仰ぎ「里は雲ばかりだが、天あよく晴れて居る、星が降るやうだ、……………おゝ寒」。

客も起ち出で見る、權がいひける如く、碧空は水よりも澄みのたり

億千萬の衆星は濱の眞砂とさらめきたる、天の大きさ、浩けさ、美
 しさ、言ふべき辭を知らず、麓の方には綿の如き雲の濛々として卷
 きつ舒びつ揺ける様あり、夜は次第に深けゆくまゝ、寒氣はいや増
 すに、爐火をかこみて客は廿六夜月を見むとはする、孝左は蒲團か
 つぎて爐邊に臥しぬ、剛方もまた彼方の隅に横はりながら猶種々の
 物語す、客も寒さと睡たさと疲れとに月まらながらうつらうつら、半
 け夢なり、石室は寂寥として須臾は音無し、紗の如き淡靄の影より
 淡さが戶外に揺曳し、そよ／＼として忍ぶばかり往來ふ山氣は、幽
 鬼の嘯くが如き微風となりて石室の屋を渡る、天地いと靜に、満山
 いと清みたり、さながら人寰の外の世に群仙の人知れず會するを忍

びて見むとするかの如く、何物をか俟たるゝ心地する夜なり。剛方
 權は時來らむとてか、起きて再び戸を開くに東は月未だ上らず、麓
 の方を眺せば綿の如くなりし雲は、墨と變じて水を含み、蓬々とし
 て躍りたちつ、上方指して起るに似たり、濃き羅漢眉を擡ませ、團
 栗眼を張りて凝視め居たる權が面に、忽ち一陣の疾風下方より颯と
 ばかり雨、氣吹うちつけたり、黄色に黨き氣は暗を染め成し、さら
 めける衆星の光は、萬燈を吹消せる如く一齊に失せぬ。
 「暴風雨だ、暴風雨だ」。

胸を打て叫びたる權が聲は客を驚かし孝左を醒まし、皆坐を正して
 團欒ひたる時は、高嶺は晦冥なる雲霧に鎖され、疾風の聲遠雷かと

疑はるゝが寶永の洞穴に起りぬ。望を失ひたる客は、

「それでは廿六夜さまは拜まれぬかいな……」

剛力權は眼を圓くして、

「廿六夜さまどこぢやあありませぬ、吾等の命が如何だか分らないだ、」

「はつ」とばかり五人の客は顔青ざめ身の毛立ちて戦さ恐れぬ、孝左もまたこの言葉心地よからず。

「權公、悪いといふまい、お客さまあ驚愕するわ、」
權は從容さして、

「悪いこつじやあない、孝さんまだ知るめいけん、真事は暴風だ

よ、それ聞きなさいあの音ぞ、石が飛ぶわ、寶永山の岩が頽れるのだらう、おれや何でも宵から怪しな天候だたあ思つたが、竟々真事になつちまつた、おれの考ぢやあ、この暴風はなかく止まねえと

思ふ。……如何だ孝さん糧食はあるかい。」

さてはと驚く孝左、

「糧食？、無い、明日朝三合目から持つて來る筈だ。」

「そりやあ珍事だ、餓死だ。」

「はつ、眞實に止むまいか。」

「止まない方は保證だ。」

客は顔見合せて無言なり。戸外の風はいや増しに強く凄く屋を撲つ

雨の音は矢を當つるに異ならず、權は恐れたる容はありながら爐灰を掻き火を吹き烟草吸ひつ、屏風岩の陰に白骨を晒せる相撲の話、八合目の路より疾風に吹き飛ばされて軀殻もといめずなれる道者の話、さては寶永山の谷間には今も猶焦石と共に白骨の片碎折々路行く人の足もとに見ゆるなど、故とらしく話説れば、五人の客恐ろしきもの見たさの好奇心に耳傾けながら寂黙としてやがて幽鬼の身に添ふを侍てる心地、恐懼のいや深くなりぬ。

皆寝もやらで曉をまてり、剛力の言葉をもさすが疑ひつ、曉となれば萬一や止まむかと思へるなり、されば荒れに荒れし風雨、勢すさまじく加はり、石窟は倒れ頽れむと肝を冷すとのみ増し、何時しか

戸口の隙より微光映して、室は夢の如くはのぐ、明けになりしが、戸は開け難し。

忽然として天地を捲きあげ天魔の箕もて蹴りたらむ大狂風、滿山震動してさながら百千の獅子一時に吼ゆる聲はげしく、龍か虎か惡鬼か羅刹か、萬雷を驅て天を拆さ地を裂く音すさまじく、叫び飛ぶ石塊の輕さと糝糠の如く紛々として窟を撲ち、刀より鋭く氷の稜よりも尖れる雨に和して亂々として躍り狂ふ、斬々たる雲、霧々たる霧渦まき漲つて黒烟の如く室に透り、呼吸も止まらむばかり、晝にはあれど夜よりも昏く、日はあれど影見ぬす、此狂奔の石の眞たゞ中に、疾風に弄ばれ亂雨にさいなまるゝ小さき石窟は、あはや刹那に

顛覆し萬々丈の天にうち上げられ木葉微塵に碎かれ、人もろ共に形もどいのすならむかどばかり、悸く胸も有や無や。

風雨は猛烈の勢にて此日をかかて暮らし、夜はまた來りぬ、今朝來るべき約束の米なければ、糧は盡きたり、雪消の水は小桶の底に干瀉の如く吸ひ殘されぬ、開くとなはざる戸際、三尺にたらぬ庭隅に尿をも捨てつ、汚れたるもの淨かるべきものと相交りたる室は、やがて惡臭もて充たされぬ、終日語らふもの無く、戶外を覗ふべくもなく、折々吐く息吸ふ息の深々と嘆ち聲の漏るゝのみ、さながら山靈の震怒に觸れて陰府の獄に幽められし七人は、生ける心地も無く、各自自信せる神佛に祈りつゝ、默念の外無かりき。

孝左の一念は此折もなほ阿袖を忘れざりき、若しこゝに暴風の爲に焼けたる砂上の骨とならば、今まで盡せる勞作は水の泡よりもはかなく、昨日今日夢路に通ふ阿袖の嘆は如何ばかりぞ、あはれ愛せる女よ、通力あらば今宵のわれを神に頼み聞えて救助を祈れ、汝に逢はでわれは死に得じ、靈驗ある氏神の摩利支天、この大御山の淺間大菩薩、恩惠あらば一度嵐を歇めたまへ、命惜しからず唯阿袖に逢はでは死し難きよ。その胸底に心の聲はかく顛はりぬ、かゝる造次顛沛の折にだに、迅雷疾風の刹那にも、その情は愛せる阿袖と共に存せるなり。

風雨の勢は衰へたる様もなし、人々は次第に飢ゑ來り渴き來りぬ、

五人の客中、一人の老いたるははや昨夜より頭痛激しく熱發で、病める人となれり、四人のものも携へたる麥粉、鶏卵を食ひ盡し、氣力衰へて聲も得たてず、孝左もまた飢渴ともに迫りぬ、七人は小桶の底なる干瀉の如き水を吸ひあひ、枇杓の底の浸潤を嘗めぬ。

剛力權は骨格逞しく脂つきたる大男、飢も渴も苦しとは言ひながら頻に思案の躰なりしが、

「孝さん、これで夜通し暴れて明日も歇まなけりやわ、皆な凍死か餓死だ、おれは同じ死ぬものなら三合目まで轉げて運だめしをやるうと思ふ、」

と言へば、孝左はそが冒險の甚しきを説き、風雨の何時までか歇ま

であるべきかを告げて、共に在る五人の客を保護せよと言へりしが權はさかず、唯坐して死を待つとの苦しさ憂とに堪得ずとて、決然として結束しぬ、五人の客もまたそのまことに危きを言ひてひたすら抑留め諫めたるが、權は却て反抗の心をもて、その胸に、大風雨の眞當中に一箇の生命を拾はむとの萬一の愉快を想ひつ、おのれに若し生命あらば、やがて來りて助くべしと言ひ捨て、風雨の隙を覗ひながら戸側に添うて立ちぬ。

刹那に戸は細く開くと思ふ間もなく閉ぢ、剛力權は天地を捲ける風雨の裡に影を埋めたり、まことに電光石火抑留むる遑無かりけり、石室は一層寂然蕭然として音なし、あはれ權は胸懷に如何なる依頼

ありけむ、六尺男の骨は今まさに獅子奮迅の勢にて飛び下る石塊に
 碎かれ、紛々として砂礫と共に行迹も知らず失せにけむ、病める老
 人は苦しげに呻きて片隅に横はれるを四人の若きものは看護ながら
 力なく寄り添うて臥たり、孝左も他に爲方なく心は絲のもつれと亂
 れて、唯一に神を祈念するのみ。

戸外の雷霆よりも烈しく凄じき響は、絶えず石室の人語を亂だし、
 相語らふ氣力もなく聞として人無きに同じ、いや増す寒氣は戦もて
 胸を抉ぐるよりも凜しく、肌は鱗甲の理を描き、薄き衣被は氷より
 も堅く冰れり、毛髮皆震ひ立ちて筋骨劈かれむかどばかり、言葉に
 むらはし難き飢渴の氣は全身を感ませ來る、黯慘たる山氣忙はしく

暗き室を往來し、耳口鼻眼悉く異しき臭に罩められ、呼吸せまりて
 魍魎の胸を壓しつけたらんかとも覺れたる。
 老人の呻吟、四人の祈禱は夢路を辿りて聞くが如くなりしが、それ
 もやうく弱りゆきぬ、さすがに一晝夜の暴風雨に疲れ、さては危
 険に馴れてあやうき夢を結びたるにや。

第二の夜は明けたり、風雨なほ止まず、午頃になりて猶歇まず黄昏
 となりてなほ歇まず、終に第三の夜となりぬ、骨格も弱からず精神
 もまた確なる忍耐強き孝左も今は身心海鼠の如く筋肉力なく累然と
 して喪家の犬よりも哀れに、燃ゆべき勢も無き爐火の残りたるに添
 うて起臥し居たるが、客の餘りに寂かさに不圖近きつ、搜りよりて

揺り起さんとするに、あなや、その觸れたるもの、脚は、氷よりも冷たく感覺はあらず、白刃を頭顱の真中に衝きこまれし如く慄へあがりぬ。

其後は全く夢よりもなほおぼろげに、わが身の現存をすら知らざるが如くなり、殆ど半ばは死して横ばりぬ、剛力權の生死、その歸り来て救はむかどの萬一の僥倖、はた旅客五人の死生につきてもさらにかすかなる影だに心に上らず、心の消失と共に、必ず存せる阿袖なる觀念もまた須臾消えたり。

夜漸く明けむとする頃、全山を震動せる大風雨は忽然として黙しぬ、静かなると世を隔てしが如し、麓の里の雞の聲は晴れて快き天の景

色を豫じめ告ぐ、孝左はそを半ば死せる胸に感じたれど、飲まず食はず凍えたと二晝夜に亘れる身は、即ちこの喜を捉へ難さのみならず、喜ばしと思ふ念だになほ生せざりき、唯眼を張りて明くなれる窟の中を願はしぬ、五人の客二人は蒲團に捲かれ臥したるまゝ、三人はまたなほひとしく眼を張り口動かすのみ、夙には言いでず。やがて天地は東海の旭日を迎へ、朗然として陰府より生けるが如し、戸外の方人聲高く砂踏む歩武の音近く、戸は忽ち開けはなされ、潤然として青天白日の光と共に、入り來しは權と三合目四合目の窟主なり、孝左は死より蘇へりたる如く起ちわがらむとせしが腰支ぬず人々は米を炊ぎ水を焚き粥を煮、湯を沸し孝左もろとも客にも供ふ、

この救助たすけに良久して孝左は手足動き歩むとも協あひ來しが、坐りたる三人の客は、涙はろく／＼雫たと滴らし、咽なびたる聲音は明かには聞きとり難く、臥したる二人を指してまたも泣きぬ、人々打寄りて蒲團ふとんかゝぐれば、憐あはれむべし老いたると若きとは寒さと飢渴と山氣やまけとに噴ふまれ、弱よき軀みに保ち難くて、その魂は昨夜にや脱け出でけむ、萎しめる花も苔こけみの花もその顔より去りて、粥も水も火あの煖ぬも終に魂をば呼び返へすとかかなはず、客の一人はいふ、老いたるは彼等の長者せんたつなり、若きものは互あいに近隣ちかみの友なり、彼に一人の許嫁いひよめあり、富士詣ふじまして歸らむ日を期して婚姻の式目出度舉げむと待てり、哀あむべし、彼は愛する少女おとめ間に待てる父母の情こころを徒ただとしてこの御山の上に死にたり、

宿世すくせの因縁いん縁と言はゞいふべし、かれと老人との死の報を齎あらして是より歸らむとの心苦しきよ、三人の纒いとに拾ひろひたる生命いのちの幸なるを思ふ心も空そらなりとて、喜と悲とをうち混まへつゝ話説わりぬ、孝左は黙して聽ききをり、玉の如くはふり落つる涙を禁こめあへずやがては聲を擧げむばかりに泣きぬ。

その家に宿せる客の死は、おのれ自身の死よりも悲しと思へり、おのれ生活くらしの爲に旅宿たびどの業わざをなし、よりて人の死を求めてわが宿に置ける如く思ひたり。老いたるものゝ家の愁嘆あはれ、若きものゝ情人おとこの痛悼いたを想おもひ憐あはれみ、そはおのが宿に起りたる事杯思ひて泣けるなり。さて權は如何にして助かりしか、客も孝左も疑ひぬ、權は坐してこ

の家^{いへ}に在^あらば、今^{いま}現^まに無限^{むげん}の死^しに奪^{さら}り去^さられし二人^{ふたり}の如^{ごと}くなるべき
 と思^{おも}ひ、幾^{あまた}度^{たび}逢^あひたる嵐^{あらし}の折^まの経^へ歴^りにより、雨^{あめ}と共に亂^{みだ}れ下^{くだ}る石^{いし}塊^{くわい}
 の中^{なか}を或^{ある}は伏^ふし或^{ある}は這^はひ、瞬^{ひま}間^まの間^ま隙^まを偷^{ひそ}みては終^{ひま}に三^{さん}合^{ごう}目^めの落^お葉^は
 松^{まつ}の根^ねに轉^まび落^おち、やうくかの小^こ舎^{しゃ}に入^いりたる由^{よし}を語^{かた}りぬ。
 まことに權^{けん}の生^{せい}命^{めい}は怪^{あや}しくも神^{かみ}の靈^{たま}護^ごありしならむ。二^{ふた}客^{きやく}の死^しは運^{うん}
 命^{めい}の盡^つきなむとを神^{かみ}の御^ご手^てにも留^{とど}め難^{がた}かりしならむと、互^{たがひ}に言^いひあ
 へり。
 此^{こゝ}日は死^しせるものゝ處^{ところ}理^りに費^つされたり。晴^はれたる天^{あま}と共に、登^{のぼ}るも
 の降^{くだ}るものゝ口^{くち}より三^{さん}晝^{じゆ}夜^やの風^{かぜ}雨^{あめ}が被^おらせたる悲^{かな}しく奇^あしき事^{こと}ども
 傳^{つた}へられぬ中^{ちゆう}道^{どう}の鬼^{おに}が澤^{さわ}の絶^た壁^{けき}にて倒^たれたるは八^{はち}合^{ごう}目^めの石^{いし}窟^{くわく}より宿

を辭^あして出^いでたる客^{きやく}なり、萬^{まん}年^{ねん}雪^{せつ}に埋^うめられたるは九^く合^{ごう}目^めの窟^{くわく}主^{しゆ}な
 り、吉^{きち}田^{でん}口^{ぐち}の七^{しち}合^{ごう}目^めに宿^{しゆく}らんとせる某^{ゆく}は行^ゆ跡^{せき}知^ちれずとなり。寶^{ほう}永^{えい}山^{さん}
 の斷^た崖^{げん}は數^{かず}十^{じゆ}丈^{ぢやう}頽^たれ落^おちて屏^{へい}風^{ふう}岩^{がん}臥^ふ龍^{りゆう}石^{せき}も埋^うめられたり。か^{こゝ}の場^ば所^{じよ}は
 風^{かぜ}避^よけ好^よげなれば折^まから休^{やす}らひ居^ゐたる人^{ひと}はあ^あらざりしやなど、山^{やま}よ
 り里^{さと}に種^{たぐひ}々の噂^{うわさ}聞^きゆる。
 那^{あの}の山^{やま}住^{ぢゆう}の生^{せい}活^{かつ}に悲^{かな}しき憂^{うれ}はしき浮^う世^せの容^{よう}態^{たい}を觀^みて、孝^{かう}左^さの望^{のぞ}も
 産^{さん}業^{げつ}の念^{ねん}もしばし消^きぬ失^しせしが、平^{へい}静^{じやう}なる天^{てん}地^ちに返^かへると共に、忽^{たち}
 ち愛^{いと}しき阿^あ袖^{そで}の面^{おもて}影^{かげ}を描^えき出^いし、やがて悲^{かな}しき紀^き念^{ねん}なる石^{いし}窟^{くわく}を見^み捨^す
 て、急^{いそ}ぎ山^{やま}をば降^{くだ}りに就^つきぬ。山^{やま}住^{ぢゆう}の調^{てう}度^どその他^{その他}の處^{ところ}理^りかれこれと
 整^{ととの}ひ了^りて。

浮世うきよに閃めける悲しき幻影まぼろしを、阿袖あそでの優しき言葉ことばにて消し、その記憶おぼえの憂うれを阿袖あそでと相見あひまて慰め、二ヶ月ふたつきの間に贏まうけたる若干そくばくの資金しきんもて復またび樂たのしき新生活しんせつを爲なさむとて、満みち溢あれたる望のぞもて山やまを降くだりぬ。

第五

孝左たかざは山やまを下くだりぬ。行方ゆくて急いそがれて女人堂にょにんどうも何時いつか過すぎ、回馬場うまばしも逢あふ人ひと稀まとなれる静しずの山路やまぢを麓ふもとに近ちかづき、負おひたる行李りょうぎを青葉あおばの蔭かげに下くだろし、汗あせふきつゝも顧かへみれば、高嶺たかねの翠あざ拭ぬぐへる如ごとく清きよく澄すみみ昨日きのう今日けふにわの大暴風雨おほあらしありし山やまとは露つゆおもはれず、葉蔭はかげの際きりより笑わらめるが如ごとき山容やまかたの美うしさに、わの寶永たからえいの左ひだりの方かた有ありや無なや白しろう見みゆるはわのが石窟いはほにてやわらむと思おもへば、悲かなしき記憶おぼえは孝左たかざの心こころを累かさねは

し、老若らうじやく二客にきやくの面影おもかげ、三人さんにんの今頃いまごろは故郷ふるさとに歸かへりて力ちからなくも遺族いぞくに物語ものごとりの言葉ことばおはれなる情態あはさまなど、浮うび來きるに懷なひ苦くるしく、おはれおのが財囊さいなんを充みせるわの御山おんやまは悲かなしくつらき浮世うきよの容態かたを視しせる御山おんやまなりけりなと思おもひつ、やがてまた下くだりて里さとに出いでたり。家路いへぢ近ちかくなるまゝに、高嶺たかねの姿すがたは雲くもにまがひ、悲かなしき記念きねんは消きえ失なせて、阿袖あそでの影かげはかれを迎むかへり。

樂たのしき喜よろこびの望のぞきもて家いへに歸かへりつゝぬ。

如何いかにしてありしならむ。二ヶ月ふたつきの留守くわしは如何いか暮くらしけむと思おもひし阿袖あそでは、依然いぜんなる愛あいらしきわが妻つまなり。依然いぜんなる美うしき笑わら顔かほ、清きよみたる眸采まぶさ、優やさしき姿容すがたなり。そが擧あげ止とまのまへに増まして放はな心に從したがふかざ

るは、元來の性として留守中に自から然かなれりしならむ、はた孝左の歸れるを喜びての様ならむ。

殘んの暑さに晝はなは汗ばむ身の水はしげなるも、夕は涼風秋を帯びて、梧桐の葉に音信るゝ颯たる聲、蟲の音に伴ふやうなりて、快き時節の昨日今日、茅屋の狭き棲居も思ひ相うたる伉儷の城郭、孝左は阿袖と對ひあうて夕餐の膳を了りたる浮世の話、まづ口に出るは富士の高嶺の遭難なり。

「おらあ、如何しやうにも斯しやうにも仕方がない黙つて神さま佛さまお祈るばかりだった、客の足へ觸つた時なぞあ、何とも言はれな心地であつた、到底あの暴風雨の模様は話したつて言つたつて了

解らない位なものだ、何しろ四斗樽のやうな大石がぐんぐん震空を打て舞うのだもの……」

殊勝らしげに頸傾け聞き居たる阿袖は、

「其様に恐ろしいもんかね、その日だったか、山荒れだつて背戸の爺さんの話だったから、五合目あたりは大變だろうつて聞いたならば、そりやわるくすると命も知れないつていふから、わしは如何なに喫驚したか知れなかつた、」

「さうだつたらう、でもおらあ助かつて斯うおまへに逢ふとが出来るやうに歸つただから可いけん、伊勢の道者の老人さんと若い人はほんとに氣の毒な可哀相なとをした、家にやあ子供があるつてい

ふし、歸つたら祝言をするつていふぢやあないか。他事たお思へない位だつた。」

孝左は覺ぬす愁然として臉を濡ませり。阿袖は、「可哀相だつたね、そのお女房さんが可哀相にね、けんどそりや因果つていふのだから。わしが心配してた處へ妙觀寺の方丈さんが來なすつて、其様に心配したつて如何にもならない、生きるも死ぬも皆んな因果因縁ていふもんだから、良人のおまへさんの事を幾ら心配したつて仕様がないつて色々言つて下すつたのだよ。」

「妙觀寺の方丈様で、方丈さんが出來たのか。」

「あゝ、三月前つから江戸から來なされただつて曩日生家へ來まし

た。」

「どうか。」

孝左はなほ權の生命の不思議に助かりし事より、難義の始終を繰返し語りぬ。阿袖は聞く毎に、さぞかしと淺からず慰めくれたれど、千辛萬苦の死地に陥り纒に玉の緒の命繋きとめたるその苦を償ふべき言葉は心に浸まざりき。そはまことに阿袖が少しも見ぬ事なりしなればならむ。

寝物語に將來はかくせむとせんと企圖を告げて、農桑の業をおのれ勵み、阿袖には少とばかりの店商ひせよなど議れば、軽く領きて好き計なりと同意せり。僅少なりとも資本は大切なれば、畑の事、苗

木の事などさるべき誰彼に議りて無益ならぬやうせんなど言へば、阿袖は然なりく答へて別にその意見などは言はざりき、何事も良人のよきに計らへ、諸共に稼殖がむと勵ましぬ。喜悦と平和と物語をもて幾らの日を過したり、源吾夫婦を訪れて、贏得若干ありたるを語れば、夫婦は勞作の効果ありしを喜びくれぬ。依然にいや親しくもあらねど、いや疎くはならぬ舅姑なりけり。わが家の状態も依然にてさして變りたるところは無し。但だ一つ變りたるやうに感じたる事あり。孝左がこの村に家居せる初は、訪ひ來て語りあひ交ると殆ど稀なりし里の若者輩の此頃は休みといへば訪ひ來て物語りすると多く、しかも菩提寺の住僧のうら若く顔白さ

殊勝らしきが、その中の話巧者として來る事繁く見たり。阿袖は舉動の快活して男らしき點あり、人に接するを好み話するにも笑ひぞめきて賑しきを喜ぶより、斯くは人々のやうく自然に集ふにやあらむ。さりとて女輩は阿袖のあまりに爽かなるを好まざるにや來るものは少かりき。孝左は眞率にて沈みがちに、語らふべき話頭に乏しく、大抵は聽者となるのみ、人々もまた孝左を訪るにはあらでさながら阿袖をのみ音なふものに似たりき。されども程過ぐる頃より、渠等は孝左の口訥に言拙く應接の榮なきを面白からず思ひたるにや、言ひ合せたらんやうに來らずなりぬ。但だ彼の僧のみは、門を通りたる折とて過り、源吾許行きたりとして訪ひ、阿袖が亡兄の忌

日なりとて來り、逍遙せうぎょうせりとて聲かくると數重なりて、圃ほより歸れる折、市より返れる折など、この生白せいぱくと若き方丈ほうじやうを室に見ると多し。方丈は巧ならぬ言葉づかひの孝左をとらへて語らせ、自己おのれまた流るゝ如き辯舌もて佛の功德くどく靈驗れいげんの事などいふ。殊にかの高嶺たかねの遭難そうなんにつきて語れる時は、得意とくいの容さま一層ひとへにて、因果いんぐわ應報やうほうの理ことわり争あらそはれぬところなど佛につきて教を孝左に傳へたりき。その度毎に阿袖は笑ましげに物語聞きて感ずる様さまなど見ゆ。後にはさしたる用もなくして屢訪しばしばひ來るとの、好ましからずと思ふに、孝左は事の序ついでに感情こころづかを言へば、阿袖は、彼の方丈さまは留守中の力になつてくれた人、それに知識ちしき道德たうとくの高しと聞けば、彼のやうなる人と親おちしむは家の徳なりと

てかれの情こころを解ときぬ。かれは僧を疑うひたるにはあらじ、その功德靈驗くどくを聞くの徳とくあらむよりは、言こと多く饒舌じやうじやうなるによりて作業しごとの妨さまたげとなるを厭いとひてなるべし。程たちて妙觀寺和尚めうくわんじやうは來ると少すくくなりぬ。此頃より夜に入て阿袖の出いでゆくとあり。父母の許もとに行くと言へり。孝左は阿袖の舉動きうどう、おのれに疎とほくなれる様さまありとは視みざりき。さることを認め易やすかりし程淺あはかなる愛あいにては無なし。妻の肉はおのれの肉の一片ひとかけなり、おのれの骨は阿袖の骨の一片ひとかけなり。おのれの心はお袖の胸に通とひ、妻の心はおのれの胸むねに托たくせられたりと思ふと、岩いわよりも堅かたきがゆへに。かくて昨日きのうと今日けふと明けゆく世に、孝左は阿袖の愛あいの懷ふところに平和へいに起おこ

臥し靜に働きて、樂しき日をば過せるなり。

家に歸りてより久しく兄許訪はざりしが、亡父母の忌日法會と式はかり營むよし兄よりの招に、或朝菴直なご阿袖に調へさせて出でゆさぬ。暑さは去りて露おける野路の萱原、遠からぬ兄の家に久しぶりの訪問、佛壇とは名ばかりなる、押入へ装置らへられし籠子の前、烟草の烟ゆたかに吹ける兄との對坐、親戚とて嫂の生家かたより他なければ老いたる姑の加はりしばかり、水いらすの兄弟が、身に應はしき世計の事などなにくれと無き話説。沈み勝ちなる言辭訥けれど、兄に比べては一層優れる談者なれば、富士の山業、危難の事どもまづ兄夫婦を驚かし、それにつけて興も添ひ談柄も多くて、

短き日脚は傾きぬ。嫂はまた人よりは優れる口舌者、夕登の膳に胡蘿午莠芋どもの煮浸の料理厨房の手業を終へ、禪脱して團樂に入れば、話は一層おかしく、隣の婆がつい近頃亡りし事、背家の娘が嫁入せる事より、太郎作の牛が子を生むで、次郎兵衛が買うて來た馬は、三俵の米負うて走るとまで、話し面白く聞かれ、やがては阿袖と逢ひそめし曩昔の情話に翻られつ、不在中は村の若もの多く出入りて浮世話しに夕涼、遊場は阿袖の家といはれ、殊には妙觀寺の方丈が阿袖を江戸にも無い美人と賞めたと聞いた里の子の間聽話、そのやうな美しい女房持たおまへさん、果報者ぞと柳揄ひたる、女心の深くはあらず、戯れ口が孝左の胸に何をか留める。刻みたるよ

りも堅く心に彫られたる妻に對する信念は、嫂の言葉明らさまに阿袖を咀ふやう聞ひながら、和尚のあまりに多く訪ひ來しは、里の若ものどひとしき意味とわれから信じて、曇れる心の阿袖にわりとは露疑はざれど、和尚といひ妙觀寺といふ言葉は唯何とは無く厭はしく覺ゆるが、その夜の法會に經讀める菩提寺の和尚は、總角よりの朋輩なれど、親しくは言も交さず。坊主は嫌かど嫂のまた嘲笑の種とせられき。

一夜を過して翌日は、湫窪の親しき家々を訪れ、何處にも秋ながら春の日に廂出したらむ悠長なる田舎談に、家路に向ひしは黄昏近き頃なりけり。

遠近の村に立ちのぼる夕烟、草に集く蟲の聲々、秋の音信いよゝしげく、清みたる空の片破月、淡き光に野面の露白く、薄紗かけて夢のやうに晴れたる富士の姿も見ゆ。家々に強いられし山醜の醉顔、芭茅萱原吹き渡る嵐たる風に醒め來れば、何とは知れず身に浸む秋の夕景色、景色の美しさ知る身ならねど、おのづから感せられけむ。心かすかに深くも沈むやうに覺て、はやく歸らむ阿袖まつらむと思ひし時、嫂の戲言は、心の片隅に残り居けむ、清みたる水の如き胸の中に、一點の汚濁を留めたり。さりとてこれを阿袖に疑の塊とは自から思はず、但だあらぬ戲言の思ひ出すにも足らぬをあやしくもわれながら際だちて思ひ出すなりき。さては唯一に急がれてやがて

家に歸れば雨戸はや閉ぢたり。

これも鎖ざしたる戸口開かんとするに、鑰を内より懸けたり。阿袖よと呼ぶに應たし。今宵歸るべき留言なれば待つべき筈なるを、またも源吾許行さけるにやはた、と思ふに、嫂の言は濁を胸に増し、さながら桑食む蠶の如く心の片隅を噛みぬ。黙して佇みしが、背戸に圍りゆきぬ。裏戸半ば開きて、夢より淡き月影に反映らう厨の裡、皿小鉢はの白う見ゆるのみにて暗し。忽と入りて行燈舉しつゝ四壁屹と願はしたる渠の眼は黒き玉の如く閃きぬ。

鈴蟲やチンチロチンチロ、松蟲やリンリン、ガチヤガチヤいふのはくつわ蟲よと、蟲狩る村兒等の唄ふ諸聲歇みて、少しはなれ

し隣家の絲紡車の響けうとく、人氣に黙せし蟋蟀のまたも籠に鳴き出しぬ。心の葉は毒蛇の牙に噛まれたらむ、痛苦を覺て仰き臥せば、生白き僧の顔ありくと見ぬ初めたるに、疑は茲に成りぬ。阿袖が此頃の他出、今宵も源吾許行さしとばかり思ふ心の裡、過ぎたる舉動の種々を一齊に思ひ出して、あれもこれもみな疑の雲の中にこめたりぬ。嫂の言は真なりけむと、胸はやうやく燃むとして、信念の風やがて是を消し。消えたりと見る間に忽ち燃えたち來る胸の炎は、さながらかれの前に悄然と立ちたる行燈の火の明滅する如く、轉輾反側の軀もろともに限なく彷徨ひ惱めり。心の眼、一は光明に輝き他は暗黒に昏み、一は天國の樂園の如く他は陰府の牢獄に

似たり。今この雙ふたつの心の眼めは、孰たゞれか一をその胸より除かではかな
 はぬ際まはとなりぬ。かれが心眼こころのめの雙ふたつながら光明ひかりに充ちて樂園の春の
 日の如く輝ける疇昔さきのことは去りて。
 待つとしもなく待たぬにもあらず、夜深よるくるまで假寐かりねの枕まくらに夢は
 結むすばざりしが、さすがに疲つかれも來りて、戸棚とだなより薄團うすだま夜着よぎ取り出し
 敷しきつ、寢ねたりけり。疑うたがひの夢は、夢より夢に結むすばれ、幻まぼろしの裡うちに富士
 の高嶺たかねに復またび登り、二個ふたつの死しせる老若らうじやくと語り若きもの、許嫁いひめかけせる乙
 女おんなに逢あひて、限かぎなき死しの谷やに陥おちりし情人おとこの仇あだなりとわれを怨うらみ嘆なげち
 たるその顔かほのやがては僧そうの姿すがたとなりて、われを嘲あざわる口吻くちづき悪わるく、撲うち
 たむとすれば阿袖あそでと化かりて逃にげ行ゆくに、追おはむとすれば雲くもたちのぼ

る富士の絶巔せつてん、石驚おどろき天怒あまのいかりて迅雷ひんらいしうきう疾風しやくふう、わが家は木葉こつば微塵みじんと亂みだれ
 飛あり状態じょうたいに、阿袖あそで阿袖あそでと呼ばはる聲こゑのわれながら高たかさにふつと眼めを
 開ひらけば、燈火とうか微明みへいにて夜よはなほ明あけず。眠ねられざる夜半よなかの幻まぼろし、わが
 疑うたがひの鬼おにの業わざかと思おもひ寢ねの夢ゆめにもあらず、秋あきの夜長よながし。
 假かりし宿やどるとはありとも曉あけには歸かへるべき阿袖あそで、終つひに歸かへらで夜よは明あけた
 り。
 夜視よめには定さだかならざりし家の様ようは、昨日きのうまでありしと變かりて見みゆれ
 ば、心の波瀾なはらん取次しだいに高たかく、さあるべしと思おもふにもあらず、調度てうどを點し
 檢しらべたるに、さしたる變異かはりも無し、將來ゆくすゑの希望のぞみはこれに繫つながれむと
 十重とこにも襲おそねし金の包つみ、もしやと篋筒けつじゆんの奥深おくふかき抽子ひきたしぬけば、まづ阿

袖の衣類痕なく失せて、紙包は空蟬の殻も留めず。

脱兎の如く家飛び出で、藁地に遠からぬ源吾の家に躍るが如く入りつ、舅姑を見て阿袖はと忙はしく質す舉動の尋常ならざるに驚きながら、袖は再昨日の朝見ぬたるのみ來らざるが、如何にせしと、これはまた最愛の娘を慮うての言。孝左は語短く、

「阿袖は金持て衣服持て逃げました。」

夫婦は顔色變るばかりなりしが、心當りやありけむ、思の外從容さて孝左を兎も角もと爐邊に留め、兩三の里人頼み來て何をか私語けば、里人の眼はさながら嘲ける如く笑ふ如く偷み視るが如く孝左に見ぬぬ。やがて人々は部置して出でゆさしが、亭午過る頃歸り來

りて報には、彼の妙觀寺和尚もまた數日寺を出で、歸らず、阿袖は和尚に伴はれて何れに行けるなりといふ。

光明のなほ微に留められたる孝左の胸の燈は、一陣の怪風に吹き滅せられ全く暗黒くなれり。妻に於ける信念の岩根は、鐵槌もて粉塵に碎かれし瓦片の如くなりぬ。

人々が驚きて目注けしまで、吃と身を起し、家に走せ歸りて投ぐるが如く身を床に倒し、良久は死せるまうに横はりぬ。

戶外には鍬負うて歸れる人の、今日は隴幾つ残れるを耕し了りぬと誇り聲に語りゆくあり。馬に肥料荷けたらむ、鈴の音悠に響きて俚歌の聲はがらに聞ゆるあり。それもこれも生活の競争、運命の追隨

に忙はしく、滔々として打寄する浮世の波浪に浮き沈みつ、われ
から知らず、漂ふ人々の聲喧し。

第六

一片の黒雲さど降ると見る間に、天地忽ち晦冥うなりて、その雲の
中よりからくど大に笑ふ聲す。痴呆者よ愚者よ、美しき女を得て
樂しめる痴漢よ、美しき妻の他人と通せるを知らでわりし膽氣もの
よ、姦婦と姦夫との爲に骨を粉にし心を蝕にして高き山に上り
死の蔭の危さを歩みたる大愚ものよ。天の日は朝の東雲より夕に至
るまで光明を汝の頭上に投げ照し、地の夜は汝に月と星との光を彰
はし休息の夢と與へ、汝をして働かしめ食はしめ衣せしめ、材木と

石と金匱とをもて建て作りたる家に住ましめたるにわらずや。汝は
働きて食ひて衣きて家に住みて人の事佳しと思はざりしや。美しき
女を見て心を動かし情を動かし、そを妻とし得て、人々の嫉妬を買
ひて樂みたるよ。人々の嫉妬を買うて樂まむとせる程までに汝は與
へられたる衣と糧と住居とに満足すると能はざりしや。あはれく
汝は鷓鴣の巢に居て鳥の棲まんずる林をおのれ獨箇の有となし得む
と思へるや、偃鼠の腹をもて龍宮にも上り得る鯉の遊ばむずる河水
をおのれ獨箇吸い盡し得むと思へるや、美しき女を得て喜びたる痴
漢よ、美しき妻を他人に奪はれたる恐ものよ。汝何とて母の胎より
世には出でたる、世に出でたらむ上は何とて汝が與へられしものに

満足せざりしや、汝が照らさるゝ光に拜し汝が蔽はるゝ影に伏して
 汝は汝の天賦たるところの本分を盡して幸福なると、なほ彼の天飛
 ふ鳥の啼々として喜の音ある如く、野の獸の悠々として樂める態あ
 る如くならむ。汝は溪水の邊に棲むべき鹿の身を忘れて、肉を斫る
 又ある巷に出でたり、汝は露おのづから濕されむ野面の草の身を忘
 れて、灌れでは枯るべき鉢の土に宿を求めり。あはれ汝は憂無き勞
 働の樂を樂とせず、禍害なき勞働の福を福とせず、乳房ありて
 養はれたるを喜の限とせずしてその他を求め、手と脚とありて働さ
 得る満足と足れりとせずしてその他を欲したる痴漢ものよ。食ふに
 糧あるを飽かずして苦き草を食ひ、飲むに水あるを足れりとせずし

て醋を飲み、衣るに服あるを忘れて網を被り、住むに家に安んせず
 して係蹄に繋りたるは汝なるよ。汝はまことにかゝらむよりは、黒
 暗より黑暗中に消ぬゆき天の光地の影を見ざる流産の子のさらに幸福
 なるを求めざりしや。さらに思へ、汝は皮と肉とをもてその身を蔽
 ひ、骨と筋とをもてその身を編み、生命と働作との恩恵と受けたる
 喜は、その流産の子たらむよりも幸福なることを忘れたるか。幸福を
 獲て幸福の外に求むるとあり、平和を得て平和の外に望むところあ
 りたればこそ、汝は今に於てその幸福も平和も生命も恩恵も無く、
 塵よ、塵に埋もれ消ぬゆく日の光を見ざる期ならずして女の胎より
 出づる流産の子の幸なるを思ひ羨むなれ。されど汝すでに汝の賦へ

られたる本分の範圍を超えて、その欲を満たさんとせり、その情を
 遣らむとせり。汝は復び流産の子の黒暗より黒暗に行くが如き幸福
 を得るとかなはず。一度天の光と地の影との間に立ちて汝はその光
 と影とを汚せり、汝が賦へられたる榮光を毀てり、汝今さらに美し
 き女に棄てられたるを幸なりと思はむとするも、汝が夢は美しき女
 もてる曩昔の浮世に通はむがゆるに、汝が夜の牀は休息を與へず。
 汝は今さらに生れざらむ前の死と同じからむものを求むるとも得じ
 汝が埋もれむとする土壤は汝の前に來らじ沈まむとする水もわらじ
 汝は美しき女を獲て喜びたり、美しき妻を抱きて樂める汝の幸福な
 りとおのれ思ひし夢の前ありしに困りて、汝が此後の夢は、光を暗

黒よりも苦しと思ひ晝を夜より憂はしと思はむ、汝が牀は汝を慰む
 ると難く、汝が勞働は汝を喜ばすと無からむ。おはれ大痴呆なるも
 のよ、大愚ものよ、罪の種をおのれ蒔きて、おのれ收穫れむとの苦
 しさを苦しと呻吟く可笑き痴漢よ。笑はれよ、嘲けられよ、罵しら
 れよ。疎まれよ、憫れがられよ。とばかり、聲はまたも阿囉々々と
 虚空に響き、消ゆゆく雲の端より忽然として金色の大光明、赫と輝
 く目眩き間より現はれたる大魔王、鏡の如き雙眼、濶と睨みたるか
 と思ふ間にまたもやからくつと笑ふと共に、影消せて天地は復び
 晦冥くなりぬ。
 夢なるか現なるか、孝左の總身は冷汗に浸りて、切齒りたる唇血に

にぢみ、握りたる掌は脂に浸めりぬ。昨日今日空屋に起臥して過
ぎゆくも何の効果あるにわらず。何處を的ともなく恍然とせる眸采
の、やがてはざらくと黒く底深く光りて、高きを睥睨む様もあり
今日も無く昨日もなく明日はもとよりわらぬ心地に、阿袖の踪跡を
探らんとにもわらず。

妙觀寺和尚の阿袖と共に、富士川渡に舟びたるを觀たりといふも
のあり、阿袖が在らずなれる前日より家は鎖ざしありてその黄昏の
淡暗に行き擁ひて出でゆくを視たりといふものあり。僧は江戸より
來しものなれば阿袖を携へて彼地に行きしなるべしといふものあり
阿袖が僧と拉れだち逃走しはいよいよ確なる事實となりて種々の評は

四隣に傳へられつ、孝左の耳には何とか響くらむ。源吾夫婦が阿袖
の逃走を確にし最愛の娘の身を案じて孝左に謝ふにはわらで愚痴を
列べに來しを見て、かれはや憂はしげなる容もなく、夫婦の言唯々
と受くるのみ。一家の變事を慰めがてら訪れ來てかれの憤怒を挑む
ものもあれど、唯軽く應ふるのみ。人々が其の冷然なるを怪しむま
で、かれの外容は平然に迫れる様無し。

程輕て孝左は終に源吾夫婦と親子の縁を解き、生家なる兄許歸ると
となりぬ。住みしわが家ながら源吾の者なれば、身に附くものどて
は何物もわらず。源吾夫婦はなかくに孝左の去れるを喜べるやう
にて、やがては夙く娘を尋ねあて呼びかへしてさるべき婿もどめむ

とすらむやうなり。かゝれば阿袖とかれとの關係を豫言せるものはその見の當れるを誇りげに語り、嫉るものは詛の成れるを喜び、憐みしものは阿袖を惡むにつけても誰しも阿袖を佳き女子なりとは思はず。美しき女は患者でなければ浮氣もの、罪作り』とは里人の同心に格言とて合點する語となれり。

三年がほど星霜を、開ける春の花、圓かの秋の月よりもなは幸ありげに暮らしたる孝左は復び兄の食客となつて、變物なり實男なりの當時の境界に返れるものから、復び世は只管勤勞勵精の人をば視難し。何事につけても兄の吩咐を俟ちて働くのみ、紙灑きの業につきても、隴圃に鋤とりても前の孝左の容は少しも見えずなりぬ。され

と怠るにはあらず遊び好きとなれるにもあらず、元よりまた自棄自暴の心を起したるにもあらず。屢茫然として何ものをか奪はれたらむ容にて、天を仰ぎて言はむとする態度あり。一旦將來の幸福と榮華とに俟つとありて勞せる渠は、復びは俟つとなく望むとなくては世に勞ると厭はしくなれるにあらむ。

嫂は、孝左の妻に捨てられたるにも似ず、憤り激せる容も見えず、おめくくと住める家をさへ奪られて寄食の身となれる意地なさを、あまりにはがゆく視るにつけても、初のはどは篤くも實にも欸遇したれ、取次に輕じ卑むやうなれるを、孝左とても快くはあらず、終に兄の許を去りて、今日を明日と他に備はれつ其日の口を糊

する憐れむべき奴隷の境に落ちぬ。

日の暮れむとを希ひ價の高からむとを望む傭人の身となりても、
なほ昔日の勞働をその舉止に現すと無く、却々に常人よりも使ひて
効果無きものと思はれ、唯だ廉潔にて食らず正直にて隠さる品性
に變りなきまゝ、郷黨皆これを賞めて、彼よりも此よりも傭ひくれ、
兎も角も飢えず渴かず日を過せり。

雪は富士の高嶺に白く、甲信の山々にわたりにて、軒毎に霜清く置か
れ、狐兎の棲林も落葉に埋もれ、溪澗の水瘦せて岩に激する聲も
細うなれる頃、里人四五と共に村近き林に通ひて、採薪の業に従ひ
ぬ。丁々の響は山彦の聲を催し、焚火の烟長閑に、鈍と鋸とを終日

の伴となし、伐りたる薪は積みあげ置きて、黄昏には各自頭より高
く束ねたるを負子に負うて歸りゆく。或日の事なりき、亭午の休息
に焚火圍みて、此林薪にして幾駄あるべき、楯拙の所得幾駄あるべ
きなど、利の的中を争そひ數の多寡を語らふとを初として、何事も
競争の世なりけり、鈍研ぎながら枯草に休らひたる一個が、
「六さん、汝の踞けてる石が幾貫あるか、的て、見なねえ」。

「この石か」と六は煙管持つ手に、おのが踞け居たる石に觸れやを
ら起ちて左視右視れば蛙の坐せるに髣髴たる山石なり。

「さうさなわ、十二三貫はあるべし」。

「否、十五貫あるべし」。

「おれわ、十四貫だ。孝さん汝の幾貫あると思ふ？」
 孝左は黙して石を視たり。蛙の生きながら跳ばむとするに似たり。
 なは黙して視居たり。

「孝さん、汝は？」と再び問はれて、
 「持て見りやあ解る。」

人々嗤と打笑ひたり。それより各自石を擡げ見つ、「うん十三貫は確
 かにある、誰も當らねなわ。」

思、邪無さかゝる事に幾許の時を費しけむ。やがてまた根を伐る枝
 を探る、繩束を結ぶ斧を振ふ、鋸を曳く、各自その務をなして黄昏
 近き頃結束を了へ、歸るに臨み、孝左は薪を負はず、かの蛙石を擡

がして負子に擔はむとするに、

「おい、孝さん、何をするだわ、其様な石よ如何するだわ」と問は
 れたれど、黙して領けるのみ。人々目を睜りて怪しがるを、なは一
 語も言はず、やがて負ひ了りて前に立ちつ、村端の郊路の十字なせ
 る場に至り、軽らかに石を卸し置きて去りぬ。

次の日は例の如く業に就けるが、歸るときは薪の外になは昨日より
 は小さき石を擔ひて同じ場に置きぬ。數日はかくて同じやうに運べ
 り。石は自から堆かく大籠築きたらむやう成れり。人々いよゝ怪し
 み、何事をなすにやと問へば、またなは黙し領くのみ後には薪を負
 はで石のみ擔ひゆき、一日一石を運ぶとさながら昔の甕を運べる

人にも似たり。漸く繁くなりて半日を石の運搬に費すに至り、擔ひ難き程の大石を動かして一日を全く費すやうになりぬ。さる翁、あらぬ事はせぬもいぞ、石を集め積みて何にか成らむと諭せば、疇昔までありし靜に順なる孝左に似ず、冷かなる笑を淺黒き顔に現はし黒水晶の如き眸子閃めきて睨まむばかり、またなほ黙して應へず。翁驚き呆れ、あはれ孝左は狂となれり。阿呆となれりと傳へ語げぬ。かくしてかれは全く生産の業を捨て、石を負うて一處に運ぶをもてその一日の業の如くなしぬ。雨降るも、風吹くも、寒さも冷たきも、一日も休むと無く石を負ひては彼處の辻に置く、往日の勸勞精勵たるその舉動は今はた石を擔ひゆき運び來る折に現はれ來りぬ。

初は兄の許に宿りしも、後には村端なる麻利支天の古祠に臥し、朝の祈の言を捧げては終日石を動かし運ぶ。渴けば乞ふて湯茶を飲み飢うれば早を訪うて腹をみたす。それも後には小川の水を掬ひ飲み、家を撰ばず食を乞ふやうにはなりぬ。衣破れたるを換へず、肩骨肉肥れて露はれ、肌汚れたるを拭はず、垢と皮膚とを分たず手脚さながら樹か石かと怪まる、頭髮結ばず鬚髯切らず、生延ぶるに任せたり。宿なき丐徒の容して憂はしき氣色露だに無し。兄憐れがりて衣を與ふるも、忽ちに石に裂き荆棘に破りて襤褸となす。朝より夕まで、石を負ひ、石を積み、かくて凡そ一年の星霜をば經たりける。

第七

江戸は賑やかな都、おもしろく楽しき地、土一升に金一升、極樂といふはあの繁昌をいふたものと、誰やらの口より聞いたとはあれど、さて淺草の観音さま、日本橋の大通、北山本門寺の五重塔のやうな閣も名主さま土藏のやうな白壁家も、豊をならべ軒を列ねて往々来るさの人、馬、車、駕籠、槍に長持、武士に町人、肩摩するまでに足しげき繁昌の有様を、何時ぞや錦繪といふものに見たとはあれど、その江戸の人に逢ふたとはなく、その江戸を観たしとて及ばぬと、到底成らぬ望ど、行きたしとだに思ふとは無かりしに、妙觀寺の和尚は江戸生れ、江戸に住みて、産湯は水道の水とやら、色白の

肌理緻かに、鼻梁の透はるやうなる、眸采の潤めるやうなる、唇の紅させるやうなる、いかさまその水の清らかさに洗ひこみし人の容姿舉動、その口より江戸はどおもしろき地は無く、江戸はど住みよき處は無く、江戸は極樂浄土と道理にも情念にも感に堪へたる話説に、ふらくと行きたき情思孝左さんが山から歸つたなら、和尚さまにお頼み申して連れてつて貰ひたき願をはのめかせば、然諾顔の和尚さま、日重なり夜締きて阿袖の眼に和尚は神々しきまで添けなくもありがたくもなつかしくもなりゆく刹那、おまへほどの美しい顔もつてこのやうな山家に土臭く埋もるゝが能でもない、江戸ならば絹の衣に玉のやうなる米の飯、耕臥しも氣樂なる壯麗な家にも住

へる、つい水汲まふ勞力も飯炊く術も要らぬほどの身分にもなれる
 人格、わしのやうな出家には樂な都をも去て、この山寺の苦しさ住
 居も、修行の一つに爲方は無けれど、それほどの佳人に生れしおま
 への、このまゝに大根甘藷食うて朝から晩まで勞力の生活、わしが
 出家で無かつたら煩惱の犬に追はれて意馬の手綱は斷れて居る時分
 おまへに樂は玉の輿にのせても見せやうものと、戯言が身にしみじ
 みと心にさへ浸みわたり、私に映す鏡臺のおのれが顔貌、父も母も
 わが娘ほど世に美しさものは無しと何時ぞや壁越に語るを聞きしが
 和尚さまの言ふ通り、わたし程のものは村には無し、思へば孝左さ
 んのやうな可愛がつてくれる人はまたと世には無いやうなれど、あ

の正直にも程がある、人の好さにも程がある、沈黙にも程がある、
 女に優しく勞働くのみが男の爲るとばかりでもあるまいに、變人と
 いはれたも無理はない、父様や母様は孝さんを貰らふは不承知、意
 氣地なしで馬鹿正直で才覺のないものは、家の聲にされぬと言はれ
 たも酷い言辭と思ふては居れど、あゝ孝さんの曲の無いに比べては
 和尚さまはぬらい人、美しい人、賢い人、親切もある人よと、さし
 たるは魔か鬼か、納涼の端居に深けし或夜の戯言、思はず把られし
 手を拂ふ念はありながら、孝左の眼前に居らぬについはかなくも失
 せて、一夜の不義に三年の樂しくありがたき家庭夫婦の義を忘れ、
 復たも挑まるゝ和尚の言葉、やがてはわが口より出で、回し難く、は

ては優れたる和尚の人格が身にとりて行末も樂しからむやう思はれ、斷ちかねたる結縁絶たんとも思はぬのみならず、その江戸を觀たくその極樂に遊びたく、あくまで和尚に契りて、さては孝左の山より歸り來れるに、道ならぬ罪とは知れど、辛苦に贏けし財囊をすら和尚の言ふまゝに掠りて走りぬ。

江戸はおもしろき都なり、樂しき地なりと思ひしは、一睡の夢より果敢なし。財囊無くなりてよりは和尚のやさしさ言も荒くなりぬ、行末も樂しき玉の興とやらん望も臆氣になりぬ。美しとわれから思ひしわが顔容は、往來の綺羅競ふ都の女に比しては、櫻の前に槿花の如し、山路行きてこそ何やらゆかしげなりし花、今は馬蹄に蹂躪

られ塵埃もろとも土に消えむより外の術無き様となりぬ。菩薩とも阿彌陀とも仰ぎ侍き憑みし人は、やがて夜叉の如く鬼の如き言辭に角も出で、否と言はれぬ羈束の繩に縛られ、さる怪しき魔にても住まむ家に籠められつ、頭半ば禿げたるを鬘に装はひたる、骨だち削けたる頬に穴の如き疵痕を白粉に埋めたる、鼻の頰れしやうなるに唇の歪みたる、咽喉よりとは思はれざる聲の陰にこもりて空に消ゆる力無き言ひせる、吵なる、跛なる臙脂白粉を命として百態に化粧し、暗き夜に柳の陰、橋の袖わたりに佇みてこそ女とも見ゆべけれ、さらすばいかで人としては思はるまじき女輩の、團樂し出入し饒舌く裡に、日毎夜毎、男の玩物にと説かるゝ責苦。あゝかくまでに

欺かれしと悟りし時は、和尚の姿復び見ぬす。切齒る唇に血浸むま
 で悔み恨み憤り悲しみ嘆き泣くにつけて、父母や嘆かむ命までもと
 愛でくれし夫や怒り居らむと思へば、罪過の恐ろしさ夜々の夢に魘
 はれ、ある限りの智慧を絞つて、或夜ひそかにこの恐ろしき都を逃
 れ出で、巡禮とも乞食とも見ゆる旅装、路はかどらず。行くこと一
 二日にて病に侵され、知らぬ家の軒端に臥して、もろくも罪惡の天
 罰に露と消ぬむ生命を不思議に人に救はれ、そこに幾日の時を過で
 し、或はまた誘勾されて、驛路のはかなき遊女に賣られむとし、あ
 らぬ人を同伴として穢されむとし、辛くも漕ぎぬけし艱難酸苦は、
 皆清きに心を導く光明となり、親に逢ひたき慕の情と夫に對する悔

の念とに喘ぎあへきつ、一年の程見ざりし村の森陰を見、踏まざり
 し村の路踏むは嬉れしくも憚あり、あやなき闇の夜竊かにわが家の
 門を訪ひたり。
 世に對する義理は措きても、人の憂めを外にしても、娘の愛惜に眼
 の無き源吾夫婦、雨に戀ひ風に思ひ瘦て見ゆるまでに神佛に祈りて
 行迹安否をもとめし娘、恙も無くて歸りしに、喜悅は夢かどばかり。
 一年の程阿補の經歷の悲しくも嘆はしくも憐なりし話説に、その不
 義罪過の報よりとも咎めず、孝左は如何にと先づ問ふ娘の言葉を外
 にして、孝左は離縁して今では狂氣、あのやうな意氣地無しおまへ
 の不義が畢竟今では家の僥倖、人の噂も七十五日といふともあり、

折を見てよき聲を此度こそは親の命令背いてはならぬとの言の葉。
 まことにおのれ等の利の爲には、世のものみなを犠牲とするも憚か
 らぬ兩親の心根を、今は心から淺ましく、世にまたあるべくもなき
 熱き愛情をわれにかけし孝左の誠實今さらに愈よわたりがたくも勿躰
 なきやうに反省る阿袖は、われゆるゑにその狂氣にはなりしと聞くに
 狭き胸の痛くて腸を千々に剉まるゝ切なさ、濁れる水の浮草よりも
 定まらず輕くうたてさかのが心の恨めしく、さぞかし怨みあらむと
 思へば、歴々に見はるゝ孝左の面影恐ろしく、われどわが阿責の苦、
 助はらんとはせぬ父母の輕薄無情、よき聲ぞれとは今のお袖に何事
 とも聞えず。娘可愛いと念よゝと忝けなくはわが身に思はぬには

あらねど、さりとしてはそのやうに言はするもわれから作りし罪過の
 結果あゝ情無いとになりゆきし身よ。
 父さま母さまの命ながら、妾は孝さんに謝ります狂になつたのも妾
 ゆゑなれば、謝まつて勘忍すりや、以前の人にならうものを、狂に
 なつたとして謝らねば罪が恐ろしい、悔いてわびねは濟みませぬ。あ
 ゝ悪い事をした悔しい事をした、孝さんほどの男はない孝さんはど
 の夫は無いものを、意氣地無しとは、父さん母さんの辭言、妾や孝
 さんに逢ひまする孝さんに謝しやう、もうゝ他に男は恐はいもの、
 欺すもの、孝さんが勘忍せずば死んでわたしは謝びまする。
 父と母とは阿袖の改悛の念に驚きもし呆れもせり。甘き言に隠し嚴

しき言に叱して、おのれ等の意に協はせんとせるが、一年の浮世の
 苦しみ地獄の責に噴まれ、極樂は孝左の妻となれる外なき念慮に凝
 つて、この一念の改悛は、孝左を復び元の夫に回さんと思ひ決しぬ。
 はては源吾は恐ろしくも怒りぬ、不義逃走を今さら痛く責めて、親
 に謝びざる不孝を敷へ、狂人の妻とならむなど、思ふはわが娘にあ
 らずとまで憤はるを妻はなだめてまた幾度か阿袖を説きしが、わが
 まゝなる氣象はかゝる時思ふに増して強く、孝左に逢はねは死せむ
 などいふに、一室に幽めて術をかへ言をかへて説きたりける。
 一室に幽められし阿袖の夢は、夜々孝左の面影に魘はれおびぬて、
 安き眠としては無きに、黄昏時の忙はしさに紛れたる人目をしのびて

家を脱け、聞けるまに／＼かの摩利支天の祠を指して出で行きぬ。

第八

堂とは名のみなる二坪ばかりの小さき祠、摩利支天を安置せりと人
 はいふなる、朽ちたるまゝの屋雨露に晒され、傾きたるまゝの柱、
 風霜に磨かれ、蟻の住は床に堆く砂を積み、蜘蛛の巢は絲より細く
 縷に懸けわたされて檐を封せり。老雨に用はるゝ斷礎は、苔蒸して
 點紋青く、幽嵐に置めらるゝ破戸は、雲を宿して斑痕黒し。
 露おさなせる逢生の上さわたる夜風に、影さだまらず微に照る月の
 光に誘はれたらむ如く、堂中に人ありて坐せり。おどろ／＼に亂れ
 たる黒髪長く、瘦せたる山字肩を蔽ひ、漆より濃き鬚髯の塵垢に煤

黒く顔埋もれたる裡より、さらりと閃めくばかりの黒闇墜さ、冷然として月を仰ぎ、忍ぶが如く鬢髪吹く風に臨みたる態凄し。衣は千稜萬襖に磨り切れて、海松のやうに地を曳きたるを被り。繩か布かは見分難き紐を腰に結び、のそくと堂を下り、傍の竹叢際に横の臥したる如き青石に近きぬ。良久そこに直立ちて何事かおぼろげに獨語す。やがて筋骨節くれたる雙手を石の下側にかけて引き揺がさんとするに、頑石動せず、頭は月に向ひて底は蟻道はひ隙だに浮かず。かれは石を離れ地に俯してさらに何事か細々と祈るが如く訴ふる如く言ひ了り、また仰ぎて天を睨み、直立ちながら虚空より風に従つて靜に降る浩々の清氣を呼吸すると少時、俄に腕を打ち胸を

撫で、雙手を石にかくると共に、靜夜の萬象悉く眠より覺めんばかり絶叫一聲、全身の筋張り隆々たる肉起りて、頑石徐に一端を土より離れ、人の如くかれの前に直立ちたり。少時の後石は復び前の方に倒さるれば、動響は四邊を震動して森深く叫びたる梟の凄き聲音も忽ち止みぬ。倒しては復た起し、起しては復た倒し、休らひてはまた動き、かくてかれが積み重ねたる石塚に達れる頃は、雞聲曉を告げ、月は山の端に傾き、はのく明けの東の天、白光淡く銅顔を照し出せり。孝左はかくして石を積み、一旦運ばむと欲せし石は、そを運びをばらねば、他の石に手をかけず。若し大石容易く揺がざらむとぞ、

は天に仰き地に俯して、かの摩利支天を祈りて、怪しく奇しき力を
出し、轉はしつゝ塚に持ちゆく、一石毎日を費し三旬を費すもまた
必ず運び了る。

村中に食を乞ふのみなれるが、漸く近村に彷徨ふに至り、錢與ふも
のあれば沽店に持ち行きて、さながら稚兒の物買ふ如く、換へらる
ゝに任せて多少を言はず、酒與ふものあれば盞の半を地に灑ぎて
天に捧げ飲む。彷徨ふところ近郷の門戸に遍くなれるに伴れ、かの
れ生命さへ捧げたりし阿袖の生家はたもるともに牛計せら住居に行
くとも敷あり。阿袖とさしむかうて擁せる爐は、今は他人の咽喉濡
ほすべき茶湯の鐵瓶を懸けられ、對膳に箸とりあげし米麥の糧炊が

れし竈の烟、往日と同じき曳窓よりなびき上る。朝はやく明星の影
ともに汲みたる井戸釣瓶も、照る日まばゆく俚歌に和して乾しける
衣の懸竿もそのまゝに、他人の水を汲まれ他人の衣を懸けられたり
兄の家より持ちゆきて接木たる溝柿も今は身丈より高く生ひて、圓
やかなる實は葉がくれに陰見しつゝ、採られむを待つに似たり。
背戸の畑の畝も曩昔おのれの鋤に鋤きたるまゝの畝なり。甘諸苗床
もおのれ設けし跡に作られたり。すべてかれか住みたる家の周圍は
依然に變らざれど、住む人の面影は、往日のわれと阿袖にあらず、
かゝる状態をその黒く閃く眸にあからさまに視ながら、さらに懐ひ
めぐらす容無く、平然としてそが家の戸にすら立ち、蓬々たる亂髪

の裡うちより獨語ひとりごとして食を乞ふ。

里人まご言ことひあへり。あはれなり、かれは女に捨てられて狂せり。否々いひかしく、狂せるにあらじ、時々獨語するとき、妙觀寺の和尚の名を言ふとあり、狂せる容さまにもてなして和尚と阿彌との歸るをまちて報むかひむとするならむ。否いなさにあらず、かれは狂せるにもあらず、狂せるやう見すにもあらず、全く魔利支天の憑のりりたるなり、見よ、人の力にては及ばぬ大石を輕々と搖がす怪力の不思議さを。と種々の評うわわれど、げにかれは唯一箇の瘦せたる喪家の犬よりも哀あはれなるべき乞食の狂者に外ならず見ゆるなりけり。

かれは今曉あけつかけて一個の大石を運び、徐ろにその日の糧かてを獲むと

て。さながら洞を出で、餌えを捜る熊の如く蹠々としてさまよひ出でぬ。往いにし日戀はれたる女と邂逅あひまひの度かさなりしともある小川流るゝ小山の陰、淙々たる水の聲、靜かに聽かば、逝ゆきて回らぬ人の世の戀と樂との紀念を語る音もあらむ。蕭々として風、誘はれ落る木葉、飛びて流に浮びゆく影、細かに視ば、遷うつりゆく人の情のはかなさを制とどめかねたる趣あらむ。秋としいへば強からぬ陽の光、さすがにのつと森陰を忍がきて、黄ばみかゝりし遠山の淡く染めし色も、眺ながめは心ゆく景われど、狂へりと言はれし人は、これに對して何と見ららむ。黙して、笑うて、沈みて、西に歩み東に行き、狂者よ、摩利支天よと罵りののしのるの兒童輩の戲弄となりつゝ、歸途に復かへりか彼の小川

の邊を過ぎ、流に沿うて一個の秤の如き石を認めたり。停りて須臾
 凝視しが、これをも塚に運はむとてか、雙手をかけて揺かすに、石
 根深く土に入り揺ぐのみにて浮かず。
 須臾休らひてはまた揺がすと幾度を重ねて、石は次第に人の意に従
 はむさまなれど、なほその場を離れざるに、夕陽眩ゆく銅顔を射ぬ。
 村々の夕煙遠近にたなびき、端山の腰はのかに白う浮きて、黄昏の
 秋の姿夢に似たる風情あり。天色は醒めたるやうに清く水の如きが、
 やう／＼暗くなりゆく間なく、彼方に遠く一點、此方に近く二點三
 點、人の世を眺めがはなる星の光何時しか萬點の影さら／＼と、深
 くも遠く濶くも大なる碧穹に満ちわたる。

かれは秤石に踞けて、この天象を究めむする星學者の如く、高く天
 を仰ぎ星光を睨み、息を吹き氣を吸ひつ、默然として憇ひ居たり。
 魂を天に奪れけむ、心を星に走らせけむ、小川に沿うて逶迤たる彼
 方の小途より肅やかに近く聴音を知らざりき。やがて復び身を起し、
 石に手懸けむと願く途端、悄然として傍に行める幽鬼の如き姿を視
 たれど、瞥見しのみ誰ぞとも問はず、満身籠めたる怪力、見る／＼
 石の一端地盤をはなれ、胸の底より叫ぶ一聲やつとばかりに押した
 はせば、地響打つて一間近く前の方へと轉びたるを、勢鋭くまた
 氣を鼓して雙手を懸くる一刹那、その石に抱きつきたる幽鬼の姿、
 沈々たる千仞の深谷に埋もるゝかれの胸底にも微に遠くは聞かるべ

さ悲しき泣聲、靜に澄みたる夜氣を渡りて虚空に散れり。かれは茫然として張りたる氣力を奪られ、屹と幽鬼を凝視たり。星光に白き面半は細き腕に蔽はれ、脂粉の氣は頰れたる黒髪より通うて、臙ろげにも女なりとは認めらる。今ぞ轉ばし初めたる秤石をば人の身に遮ぎられ、困じたる態にて、つと寄りつ押しのかんとするに、身を揺がして見あげたる白き顔は、蓬蓬たる亂髪に蔽はれし銅面にはたと對ひぬ。

「孝さん……、勘忍して……」。

女の聲に、かれの眸は暗にも異しき彩光するどく、電光に觸れたらむ如く直立ちしまし、壓つけられしやうに低き號叫その胸より響き

たるが、唇は結びたるまゝ默然として言を發せず。
 「孝さん、孝さん、妾だ！、濟まなかつた、勘忍しておくれ、勘忍しておくれ。」

女はさらに脚下に俯してかく言へど、なほ默。

「孝さん、妾だ、阿袖だ、悔謝に來ました、何卒く勘忍してくれな
 いか、拜むから堪忍しておくれ、拜みます拜みます、……な、孝さん」。

應は一語だに無く、哀しき聲のみ續く、

「今さら言つたつて、謝つたどて、妾が悪かつたとは何と言はれても言譯無し、つい彼の坊主奴に欺騙されて、おまへの親切苦勞を無

にし、逃げたとは後悔しても及ばない、不義い事とは知つてたが、
 魔がさしたのか、悔やじいことをしてしまつた、孝さん悔謝るから
 ……撲つなり蹴るなり、存分にして勘忍しておくれ、拜むから、拜
 みます、……孝さん。」
 悔恨の情は千丈の堤を切つたる浪より強く胸に漲り、遣る方なき身
 を縋りよせて、偃さ來る動氣に断れては續く言、繰り返へし、石に
 取りつき謝びたりける。
 聞くとは無く聞かぬともなく黙したちたる孝左、折しも東の山に高
 く上れる月影の、哀れに清く照らす阿袖の亂れたる姿を見て、凄さ
 はどに黒き眸を開き、冷然として笑みたるが、やがて惨ましき氣色

瘦せたる頬に渡り、ほろ／＼と滴り落つる露なす涙掃ひもやらず、
 直なる腰をば長髪の地を曳くまでに屈けたるが、忽ち復た冷然とし
 て直立ちたるまゝ、黙々。
 阿袖は断れたる襦袢衣の孝左の袖を且つ拉へ、復び、過にし事の罪
 は如何にしても言ひ解く方便はあるべからず、また言解くべき理の
 わるにはあらず、深くもおのが罪の恐ろしさ、謝ぶるもなかくに
 罪を重ぬらむ。唯悔いたりし今よりは幾千代かけて契りは變へず、身
 をつくしても今まで犯せし罪償はん。今夜來て謝ぶる情念の底せめ
 ては汲み取り、宥すどだにも言ひくれよ、と嘆きつ泣きつ縋りつゝ
 謝びけれど、かれは依然に黙して立てり。

清める月は光取次に明く、啼蟲の聲哀なる秋草をかたしき俯せる阿
袖、隻手石に凭せて見あぐるに、蓬々の亂髪、參々たる黒髯、瘦
肩稜々として月影に聳立、破れし裳衣のひらくと微風に靡さたる、
其人としも思はれず。住にし日の俤は、唯きらくせる眸の光に残
るのみなれど、ありし事は心の記憶を呼び返へし、懐ひ來れば現々
と過ぎし睦言の優しかりたる情態さへ浮び來る。沈々たるその姿、
見ふるし人とも覺えず、あゝ何のもの狂はしにてか、異心あり
てこの人を、かくは成り果てさせけるよ、とまたさら淺ましきわ
が罪過をくりかへすと共に、總身恐ろしく物に襲はる心地して、徐
よ吹く秋の夜風、又やに身を切る寒さに慄へて、石抱へたるそのまゝ

に聲無く、われから呵責の鞭に泣く涙露を結びて露に落つ、天言は
ず地言はず、石言はず、人言はず、石か人か涙か露か、黙せる世に
は孰れを分かず、萬點の星その影淡く、映らふ月の光獨り清みゆき、
遙に高く中天の天路を進みゆくのみ。
深く深くまた深き沈黙の谷の底より、せめて微かに響くべき心の聲
を聴かむとて、千たび喚び百たび叫ぶ悔の音にも、奈落の底のその
奥にや沈みはてけむ孝左の情念は、復びは憂しと見し世に醒覺むべ
くも見えず。無念無想非情なる頑石にてさへ、仙術によりては羊に
も生化りし例あるものを、あはれこの血あり息ある屍は、熱鐵を吞
む思ある罪過の悔の號泣に應ふべくも無かりけり。」

慘然として女は石より起ち離れ、亂髮風に揺らぐと身を慄はして、
 絶つて男の腕をどれば、黒き眸はさらりと動き、瞬く間に涙の光は
 ろりと落るかと思ふ間に消えて、素直と起ちてまた冷然。
 「悪婆！」
 と一聲。樹身をあざむく鐵腕に、雪より白き手を拂つて、夜の草木
 の眠さへ醒むべき一種の奇しき叫聲、風に震ふて虚空に散りぬ。鳥
 の聲ならず獸の聲ならず、人のにてもあらず、孝左の胸より出で
 し聲なり。「轉びし身やうやくに起し、今はと思ひ限りたるか惜々た
 る阿袖の孤影、流に沿うて露草の徑ふみわけ、遙になりて幽鬼の如
 く烟にかくれぬ。

月こそ照せ、清き野面に臥したる石と、立ちたる人ごと。

第九

昨夜孝左の腕に動かされ阿袖の手に擁へられし彼の杵の如き石、今
 朝は朝陽の輝々たる光を受けて、塚石に遠からぬ路の側に横たはり、
 孝左は其處に徘徊せり。「晝近き頃、四五の父老に隨がはれ兩個の漢
 に昇かれたる檐架筵は、一個の死屍を載せて此路に來りぬ。孝左を
 認めて昇きたるものは歩を止め、父老に何事をか語りつやがて近づ
 きぬ。孝左は父老に逢ひて微笑みしが、濕れたる黒髮亂れて蓆の上
 に敷き、青ざめたる石蠟の如き顔の半面、僅かに覆はれし蓆より現
 はれたるを認めつ、黒眸瞳みて誰ぞと問はむ様なり、父老の一個は

進みて言ひぬ。孝左よ、こは青樹の源吾の娘なり、汝の妻となりし阿袖なり。昨夜にや上流に投身けむ、今朝しも富士川渡せむとせる舟子が、舟側に浮び居たるを見出でたり、時経たれば火も薬も効なく、今青樹へと送りゆくなり。あはれ、如何にしてか身を投げけむ、汝はこの女に捨てられてかゝる態とはなれるを、こを見れば恨めしき心も失せて、可哀と思はんや、いかに、哀れむべし、汝もこの女も。妻なり夫なりし因縁に、せめてはこの女の死顔に逢ふは、後生の功德にもならむ。と、蓆を少し開きて、心ありや無しや視つめ居たる孝左に示しぬ。

險空しく閉ぢたり。唇空しく開きたり。清く湛へし春の眸の水、今

は何處の流にか歸せし。ゆかしき呼吸の香、今は何處の花にか移る。垂れたる手足横はりたる軀、鉛色に固く冷に凝りたる、あはれ幾世を重ねても、この人復び言ひ動くべしと覺えず。曾ては戀語りたる唇よ、夢の如く相見たる眸よ、温かき玉の如くかき抱きたる手よ。足よ軀よ、魂は骨と筋と肉と皮と血との人より離れて、今は何處に離り去りけむ。

こを何と見たるらむ。父老の言を何と聽きたらむ。孝左は冷やかに笑みて顔さもせざるに、父老等は呆れ顔、口々に夫妻の悲しき運命を説きつゝあはれなる屍を護送し行きぬ。

蕭然として一群の人影彼方の森陰に隠るゝまで、かれは茫々たる態

にて直立ちつゝ見送りたる、其黒き眼には、一滴二滴の露を帯び、
 惨たる色その面を籠めたるが、忽ち身をかへしてまた秤石に雙手を
 かけ、ぬいやつと聲をかけたる金剛力に一轉せらるゝ石を倒して、
 嘯く如く天をば仰ぎ大に笑ふその面は、さながら小兒のそれよりも
 邪氣無し。かくてその日も暮れて夜は來れり。暗黒の裡には晝と同
 じき石の地響聞えたり。月は出で、昨夜と同じき人と石とを照しか
 り。雞聲曉を告ぐる頃は、秤石は彼の塚の前に据ゑられぬ。亂髪を
 朝風の寒さに吹きなびかせたる人は、摩利支天の祠の裡に臥して眠
 りぬ。
 阿袖なる愛しき妻去りて、石を積みはじめたる時、孝左の齡は三十

路に足らざりき。時しも世に騒がしき維新の殺氣漲ざり、轅を賣て
 刀に換ゆる人心、この幽靜なる孤村の民も、名主代官の口より傳へ
 られたる戦争の話頭に夢驚かされ、如何になりゆく世にやあらむな
 ど、互に警めつ懼れつするにひさかへ、孝左は人寰の風塵すべて知
 らず、唯孜孜として石を運び石を積みぬ。
 海の如く血を流し、山の如くに屍を積みたる戦争に、幾らの人間は
 鬼となり骨となり、これよりかれに遷りゆく時勢の犠牲となりて、
 世間の状態變りたるが、かれは五家山中の童の如く桃源洞裏の翁の
 如く、春を記せず秋を識さず、世は秦となり漢となるに關はらず、
 磊々たる石を父子ともしけむ君臣ともしけむ、犖獨の孤影をば昔な

がらの月に照し、霜と雪とに染め深うせる鬢髪を、彼の摩利支天祠
 邊を流るゝ逝水に映し、勞れず、倦まず、その塔を積みぬ。
 世に崇められ時に敬まはれたる達人も賢者も識者も英雄も俊傑も白
 又の下に消ぬ牢囚の裡に亡び、城山松の夕嵐、吹くや腥き戦場の露
 朝にあへなく陽炎と化り、清水谷の五月雨、打つやはかなく路上の
 烟暮にかなしき鴈聲の血に塗れけむ時よ、蒼苔は忽ち碑上の名を封
 じ埋め、蠶魚は空しく史中の字を蝕み盡すの間よ、老いたるは永く
 忘却の墓に入り、幼きは遠けき希望の園に出で、逸樂も辛苦も榮華
 も禍災もひとしく歴劫茫茫の裡に逆旅の如く世を行く際に在て、か
 れは終古に黙し千秋に冷かなる言はず語らず去來今をば識らざらむ

石塊を抱き轉ばし擡げ積みつゝ、世に名も無き寒谷の孤村に、その
 呼吸を續け、水と糧とにその命を繋げ、崇められ敬まはれけむ人間
 とひとしなみに生き、ひとしなみに天を戴き地を履み居たり。石を
 轉ばし積むをもて、天より受けし命を行はむ如くに、日々の職とな
 してぞ。

この渺たる一匹夫は、かくて昔人のユーフロート河畔に築けるバベ
 ル塔を積む如く、單身營々、風霜に年々の骨を磨し、雨露に夜々の
 肉を消し去ると四十年。

雪の如き白髪を冠し寒岩の如き瘦軀を支へて七十年の齡と迎へし時
 金字塔に似たる渠の尖石塔は築き成されぬ。渠の創めたる事はかれ

の手にて爲しとげられぬ。

疾風砂を飛し迅雷耳を劈き、滄海を捲さかへせる如き大雨に、天地晦冥なりける明治廿年五月某日の後朝、かの尖石塔は崩れず壞れず、平郊に卓然として蒼空を仰ぎたる處、彼方に距ること數十歩、柱も扉も擔も床も紛々狼藉、摧け頽れたる古祠の跡に、石より冷かに凝りてミイラの如くなる、坐したるまゝの人屍ありき。(二十四年稿)

文 園

(二十五年)

文園何處素麒麟。	唯管操觚供療貧。
樂地買畧皆俗物。	窮途持命是詩人。
灑來慘愴心中淚。	染出烟霞紙上春。
知已千秋天獨在。	重巖幽巖好藏身。

霞浦一瞥

(一) 烟中の筑波

常州の山に紫の筑波の君あり、湖に烟の霞浦の君あり。湖神山靈、夢裡にわれを招くこと切なり。游情禁じ難く、少閑を偷むで、程を上野發の鐵車に藉り武總の大野を馳す。野梅香裡、田端の停車場を過ぎて、平田萬頃四顧廣濶、田徑遙かなる處に若草の萌ぬ出でたるを摘む兒女、遅々たる駄馬を驅る農夫、眸中杳々、人は豆の如く馬は蟻よりも小なり。南北千住を過ぎて松戸驛畔江戸川を渡る、柴舟の晴を負ふて流下するあり。柏驛に至る、

黄茅の家兩三軒、小丘點綴の間に隠見す。これより丘陵起伏我孫子の邊右方に手賀沼を觀、やがて利根川を渡る、清沙碧江杳然として来る、天濶く、遠樹浮び、風嫋々たるを含み、烟霰暖々たるに浴して流を遡る白帆點々。水自ら悠悠々舟を遣り、舟自から遠く人を送る。閑澹の風光頻に詩興を動かす。取手驛を過ぎ、窓より筑波の山容をもとむれども見ゆず。一客あり丁寧に杳靄の裡を指點するに、雙眸を凝らせば、淡貌杳かに蒼嵐の衣をまとひ、烟翠の紗を隔て、雙尖の屏顔夢の如く、動もすれば隱々として失はんとす。窓に凭りていよく眸を凝らす、車馳するに随つて一重の烟紗一重披き、一襲の嵐衣一襲脱ぎ淡如無らんとせる遙影は、取次に朧明なる雙尖の形

容と成り、朧明なる形容はやがて明媚なる山態を雙眸に映し來り、牛久驛に至る頃、牛久沼の碧波溶々空を浸せる處、霞の袖のかざしを拂て、風袂飄々雲裾楚々たる筑波山は、嫣然として初めて一笑。

雪は申さず先づ紫の筑波山

嵐雪

(二) 土浦街頭

牛久沼の水光はやがて丘陵の後に隠れ、筑波の嫣然たる屏顔は、積翠の眉黛句やかに相對して、車の馳するに追隨ふ。田園村郭丘陵の觀望稍々狭小の間に荒川沖を過ぎて、茂林鬱樹の裡を行くこと須臾、忽地に眼界一濶、平湖一碧右の方に開き、左に雲山重々高く筑波を撐げ、當中の一驛瓦甍整齊たる街巷に近く、鐵車徐に轍を停め、

扉の啓く音と共に、土浦々々と喚ぶ聲高し。
車を下り徑路を迂回し、瀬々の白波霞をうながす櫻川の野橋を渡り、
一茅店に路を問ひて、阿見村指して行く行く顧みすれば、裾かけて
高く雲山に擁せらるゝ筑波は、此時笑顔に威容を添へ、蓮歌嶽豊田
山は宛然拜するが如く蜿蜒して東方に亘れり。一望平田湖畔に迫り、
風蘆獵々遠く長汀曲浦を描きたる處、霞浦の湖光澀々、杳々烟波靜
に天を湛へたり。
眼に去來白帆の招くあり、耳に階々雲雀の喚ぶあり。わが魂は蒸地
に一往し、湖面に馳せんとして脚隨はず、迂回し屈曲せる路を行く
こと漸く半里強、平田に孤立せる老松樹下に來りぬ。

(三) 樹下石上

此處平田一樹無く、唯此孤松あり、老幹の皺紋は明に霜雪の年を
疊み、古根の苔色深く雨露の史を刻む。樹下に頑石あり、渾圓にし
て面平なり、踞して四望の便を得べし。
威を帯びたる筑波の山靈、仰げば崇く、笑を湛へたる霞の湖神、望
めば杳なり。老松と頑石とは筑波と霞浦とに相待て、鬚髯として神
秘なる或意義を藏せり。苔蘚が畫し出せる樹身の怪文、風露が印し
刻めば石面の奇字は、何等の該博なる言語學者にも、何等の深奥な
る人類學者にも、竟に讀み得べからず解し難き自然の碑帖なり、然
も、この碑帖は暗に湖神と山靈との消息をわれに視せり。

月朧おぼろに天夢そらに浮うきたる春の夜半よはに、霞あせの浴後よくごけ烟けりの衣半まゆば脱ぬきたる湖こ神かみど、紫むらさの雲うみの衾かすま重かさねし殿居どのゐより、虚まよを踏ふみ降くだる山靈やまらみどが逍遙遊せうせうゆうの愁いごみに、此樹下石上ここのきに自然しぜんの愛あひを語りし記録きこくを、われは心に讀よみぬ。この碑帖ひてつによりて自然しぜんの歴史れきしを解かいし得えたり。

松は長く天籟てんさいの通路かよみちを歌うたひ、石は終古しうこの黙まを守まもれり。人は樹下石上ここのき湖山ここのきの愛あひを味あじひぬ。

(四) 漁磯の孤舟

自然しぜんの消息せきしき讀よみ盡つくし難がたき老松頑石らうせうけんせきに別わかれ、小川せがはを越こぬ田徑こみちを走はり、初はめて湖畔こはんに達いたして一漁家いちりやうかを訪とふ。黄茅くわうぼうの矮屋わいおく、環堵蕭然くわんとせうぜん、屋傍おくわらに柴薪さいしん高たかく積つむて山やまの如ごとし。爐ろを擁擁して悠寛ゆうかんに坐ませる翁おきなあり、半白はんぱくの

髮斑かみまだら々に霜しもを置おけり。まづ天氣てんきを話かし寒暑かんしよを語り、魚蟹網罟ぎょがいもうそを説とく水國すゐこくの風物ふうぶつ諄々しんしん聽きくべし。孤舟こしうあり、人無ひとなくて自おのら汀なぎさに横よこはり、輕浪細波けいろうさいはの緩ゆるく弄いふに任まかせり。わが懷舟こころうと共に搖ゆる、翁おきなを勞おし水の中央ちゆうおうに泛うかばんと思おもふ。先まゆきて空船くうせんの艦かべに倚より、ふりさけ見れば、烟水微茫えんすゐみぼう、臥ふたる姿すがたの志戸しどの岬みさき、牛渡うしわたり、平川ひらがはかけて一帯いちたいの翠壁すゐへき。遠とほき霞あせに浮島うきしまも髣髴ほうふつとして見みぬつ隠かくれつ烟けりの裡うちに迷藏めいざうを捉とらふが如ごとし。水青みづあおく山青やまあおく樹青きうあおく浩々漾々かうかうようよう、帆影はんかげの點々てんてん白しろさを描えきたり。ブライヤント詩裡ブライヤントしりの水鳥みづどりあり影かげは迢々せうせう香冥かうめいに入る、シエレー歌中シエレーかちゆうの雲雀ひばりあり、晴せいを祝いわして空そらに冲おる。身みは是自然しぜんの搖籃ゆりかごの愛兒あいごとなつて、世情せじやうを忘わすれ人寰じんくわんを忘わすれ、水天すゐてんに融ゆ化くわせられむとす。斯ごとの如ごとく在あること多た

時。

折しも天外風わり、蓬々然として湖波を吹起す。清かりし天空徐に
淡々の雲紗に蔽はれぬ。顧みれば筑波の峯尖に怪雲一朵、徒ならず
揺動す。翁來りて曰ふ、雨風大に至らむと。

十數分の後、山や水や樹や齊しく淡墨に抹せられたり。帆影消ぬ鳥
聲絶ぬ菰蒲獵々長汀曲浦一時に搖きて湖の風寒し。

(五) 春風猶未到常州

雲の補垣、筑波の紫翠を蔽ひ、霧の羅幕、霞の烟波を没して、自然
の怡容、湖山の清貌は既に見難し。蒼慘たる濕雲、湖面の空濛を重
ぬると齊しく、亂雨紛々として舟を打つ、水紋碎け躍り浪花亂れ飛

ぶ、雨脚塵の如く風頭黒し。天地は冥々蕭々、風雨に冷殺せられた
り。

孤舟を風浪の手に委して、復ひ翁が漁家の人寰に入り、爐火を焚き
村茗を煮て語らへば、自然風光に換ゆべし江湖人寰の消息は、淺か
らざる趣味を帯び將て、わが胸底に通ひたり。

數時間の後、われは鐵車の窓に傍ひ、雲の筑波と雨の霞浦とに點頭
して少別を告げたりと。

鷗心來訪水雲區。 蓬浦遙々看欲無。
春信未通筑波嶺。 寒風冷雨滿霞湖。

夜半逍遙

(一) 朧 月

天はさながら花の香に醺へる朧月夜に、あくがれたるわれは、飄然
 寓を出で、比丘尼橋を渡れば、唯ある軒端の花夢の如く月を宿し、
 橋頭の垂楊烟に眠れる處、時計臺の漏聲一時を報じ、そよ吹く風に
 遞らるゝ音響徐に虚空に渡れり。
 往來の人影はや絶へて、折々遠く軋々たる車聲を聞きつゝ、御溝に
 沿うて漫に歩む。

交番所の彩燈の覺束なくも光れる小闇に陰に、黝然として黒き人影

の佇立たる、夜もすがらの警戒は是か。家々の軒燈は深き休息の人
 夢を護り容に、沈々として月より外の光を帯たり。
 輕羅の如き烟を月に浴びたる隄の松、かざせる影を石壁に描けば、
 石壁は松影ながらその影を水面に倒映せり。人に知られぬ微風あり、
 水の上を偷み度る時、水はゆらく半輪の月を橋うて、波紋細々夢
 路にかくれゆく。月や言はず、水と風とを藉りてその名くべからざ
 る愛の天心を彰はすにやあらむ。
 黝然として佇みたる黒影は、人間社會の定めたる罪の消息を警め、
 朧明に照れる月影は、天の賦へたる愛の表彰を描く。あはれわれは
 此定めざるべからざる罪の巷に夜深く逍遙ひ出で、限なき天の愛

罩めたる月をゆかしく天と水とに觀たり。
 この心もて月を仰げば、月は微笑むが如くその影をわれに投げてさ
 ながら惜まず、俯せば水の面の影さらに名くべからざる微妙なる容
 形を描きて、なほ深くわが心を惹く。まことに碧落の愛はわが心を
 水と月に融かして、空冥に化したる身、良久無我の境界に悠然とし
 て、岸邊の柳陰に佇みたり。
 折から憂たる一聲に、幻覺破れて願眇けば、劍櫛を握りたる人は嚴
 乎として傍に立ちぬ、踴然として佇みたるかの黑影なりき。誰何せ
 られたるに、月おもしろく水に映りしが故と應ふれば、眞黒に羅紗
 覆ふたるかれの色容も、はからず笑みつゝ、その警戒の眼をわけて、

愛に満ちたる天の月を閑に仰ぎたり。

(二) 明神祠畔

劍鞘曳去る黑影を後に、八重洲河岸を右に折れて大路に出づれば、
 此には柳陰の烟態無く花上の月容無く、石壁の松影も水中の波紋も
 また見るべからず。唯直道坦々鐵路遠く、一陣に入り、萬家の瓦甍
 家牌齋く電燈氣燈の燦たるに浴して夜の色を帯びたりさすがに都大
 路の車の轍なほ絶えず、茶飯、餛飩、天麩羅、おでん、一寸一杯な
 ど記したる障子構の屋臺店、此處彼處に羹の湯氣烟とたちて月の平
 に散りゆく風情あるものから、夜の「自然」の聲色たるべき「寂寥」
 はなほ見るべからず。

日本橋より同じやうに氣燈まばゆく、月の光は有無なる路をひた歩
 みに行きて萬世橋に到り、橋欄の石冷に暖める月華を帯びたるに靠
 れて、聲無き流水を嘸すに、流に舟あり、月に明暗の影を描きたる
 苦の裡、靜に吹通ふ夜の春風寒からざる、舟人の眠や穩ならん。
 其舟人は昨日は東、今日は西なる稻妻の如く、身を流水の月日に任
 せて、舟を浮世に五十年の人生、樂しきも苦しきも東の間の夢どや
 觀じたるが多からむを想ふ。わが心はまた其舟の中に深く入りこ
 みて、苦の裡なる人は恁麼なる性ならむかなどいよ、空想に情思を
 馳せたりき。かくて歩武は志す方もなくて、何時しか神田明神の石
 燈を、心とも無く登りゆき開化樓の軒燈空く、松さながら虬龍の如

(三) 幻想

くかざせる陰に、頑たる黙石に踞して、見ゆる限の街衢を望みたり。
 一様に黒く沈みたる萬家の參差たるは、的爍として點々星の如く凄
 く耀く電燈の光と溶々たる月の温き影と相和して、浩々たる大街衢
 を涯無き微茫の烟の裡に、朧明に遠く罩めたり。
 「自然」の寂寥なる面影は茲に現はれぬ。言ふべからざる或る秘密の
 消息を齎し來て、潜やかにわが胸に忍べり。宛然見るべからざるも
 の、天と地との鎖鑰を持ち來て、深く遠く浩き宇宙の門關を啓けど
 嗚咽くに鬢鬚たり。この心頭に根觸たる感は、わが渾身を石と共に
 黙境に埋めたり。

あはれ今、人は皆夢に在り。金屋玉堂の障壁もて護らるゝものも、破扉蔽席の環堵に危く安んずるものも、さては蓆一枚はかなき石の枕に花の下臥せるものも、盡く皆休息の眠に在り。かれ等の眠はそ
 の灑ぎたる涙を忘れ、かれ等の唇はその呼びたる語を忘れ、かれ等
 の胸はその抱きたる戀と悲とを忘れ、その憂愁、嬉笑、怒罵、怨恨、
 すべての罪惡と榮譽との種子を盡く忘れ果て、かれ等の靈は皆其骨
 肉より游離れて、行迹を無何有の境に遷し、無爲にして永遠なる天
 上の故郷に、樂園の花月をもとめ行けり。聞寂默せる裡に、なほ幽
 遠なる聲音の宛然花の陰に蝶の邂逅ふ時の如く通ふは、かれ等夢魂
 の互に相囁くにはあらずや。實にかれ等人皆は、自己が夢魂の何

處に彷徨へるかを自ら知ると無き、刹那の「死境」に醒臥せる屍なり。その夢魂が骨肉の窩に返り來べき曉までは、白き壁黒き扉めて圍はれたる萬戸の家は皆かれ等を埋むる忘却の墓なりけり。
 『あはれ人は皆この刹那の忘却の墓に入るを休息と喜びて、かの永遠の忘却の墓に埋めらるゝを苦痛悲哀と懼る、懼るも雖も、夢魂一度その天上の故郷に永住を戀ひ行き去らむ時、はた留め難からむ。さらば斯る静けき春の夜に月に浮かれし夢魂が、汝の骨肉を刹那の墓に残し去る時と同じく、哀なる六尺の棺中、永遠の墓に、骨肉を置き去られむ時もまた、汝は平靜なる心と安定なる情とをもて、無何有の境に遊ばむは至理なる道にあらずや』。

なほ刹那だにわが骨肉を離らざる夢魂の聲はかくわが胸に聞えたり
今更に「生」と「死」との門を鎖鑰もて啓かむとせるわれも、「自然」の
寂寥なる夜氣久しく松下石上に留まらしめざるに、やがて復び石磴
を下り大路に出で、顧みれば、明神の森黒き雲の如く、月に深けたる
夜は三時、遠く二三の鶏聲を聞きぬ、曾て故園青山白雲の間、桃花
流水の杳然たる寰區に、世を塵の外に忘れたる夢を喚ばれしと同じ
さ其聲を。

春感

春風京洛幾曾經、
有髮身須塵裡住。
重簾人靜花如夢、
好把幽窗多少感。

(廿七年)

湖海鷗心竟未停、
莫愁醉在酒邊聽。
古廟宵深月獨醒、
題詩故里舊旗亭。

(三十年)

ふくるふ

常盤木の葉に置きわたす

白露を、

玉と散して吹風の、

聲のみ高く、照る月の、

光さやけし、山里は、

さよら小川の水の音も、

ひそみゆくなる夜を深み、

ふりさけ見れば天の原、

浮雲消れて、いや高く、
 限なくさねぬ、いや遠く、
 際なく澄めり、さながらに、
 天と地とは、みどり子の、
 搖籃に結ぶ夢の如、
 いと安らげく憇ひつゝ、
 夜のふすまに眠るなり。』
 賤が伏屋のその涙、
 玉の臺のその宴、
 願も悔も罪禍も、

幸も憂も、人の世を、
 纏ふ煩惱はおしなべて、
 天の戸渡る月影に、
 夜の護衛をまかせおきて、
 休息の床に臥しにけり。
 繁き林の奥深く、
 杉の葉がくれ、ふくろふの、
 獨り起き居て、たくましき、
 翼を畳み、圓らなる、
 眼を開き、樹間漏る、

月をにらみて、何事の、
 ありとも見ぬぞ唯管に、
 啼く聲凄し夜もすがら。
 月をや呼ばふ、天高み、
 月やは言はむ、はたやまた、
 森をや呼ばふ、影くらみ、
 森は語らじ、山彦も、
 潜み黙せる小夜中に、
 應へむものは何かある。
 あはれふくろふ、汝はしも、

わやめもわかぬ鳥玉の、
 暗さに紛れおのれのみ、
 光れる眼おしひらき、
 時占めけむ百鳥の、
 小枝の宿り危くも、
 結べる夢をぬすみつゝ、
 木の葉の床を、襲ひては、
 搜り歩き、ちよのみの、
 父の鳥、はよそはの、
 母の鳥の羽がひにし、

慾にし飽くを榮華とも、
 福祉ともいばゞ、汝はしも、
 榮華なりけり福なりけり、
 樂しかるべき汝が心、
 何に叫ぶらむ悲しげに。
 襁褓纏ひて泣く兒の、
 乳房もとむる聲の如、
 寄邊を知らぬ老の身の、
 神を願はる聲の如、
 すと悲しくも懐しく、

休らひ臥せる雛鳥を、
 親もろとも屠りつゝ、
 いとも痛まし、其肉を、
 割てとり食み、其血をば、
 啜り飲みつゝ、哀れなる、
 幼き鳥を、おのが慾の、
 犠牲とはなして腹をみて、
 咽喉を濡し、限なき、
 慾にぞ飽ける汝が身は。
 あはれふくろふいぞ問はん、

此夜もすがら叫ぶらむ、
月や語らず、森こたへず、
天地眠れる此夜ふけ、
何に向ひて呼ばふらむ。
汝が聲をしも聞くからに、
心動かぬ人やある、
心の底に潜みたる、
わが聲はしもつけてらふ、
あはれふくろふ汝が聲は、
いとすさまじくいと悲し、

榮華に飽ける聲ならず、
福に満ちたる聲ならず、
罪に傷みて呼ばふなる、
獄舎の暗黒を穿ちつゝ、
漏れくる聲と異ならず。
あゝ、ふくろふよ、汝が身の、
心の飢と渴とは、
肉に飽きても、いね難く、
血をすゝりてもいね難し、
心の飢餓と、渴とを、

醒めてし見れば高嶺なる、
月吹き落し、山風の、
ゆく末白し、霜のあり明。

(二十四年)

いやさむものは、血肉の、
外にこそあれ、汝もまた、
求むるものゝありてこそ、
肉と血潮にあさながら、
眠るべき夜に眠らずて、
月と天とに呼ばふらむ。」
汝が聲悲しいと懐し、
罪におさふす空蟬の、
世をもしばしは忘れたる、
夢もはかなく、汝が聲に、

無聲聲

漆園が胡蝶の夢に春は醒めて空しく、康節が杜鵑の聲に、夏は去りて痕なく、野分の
 風、梢をたゞ肌寒く、前栽の海棠落花狼籍、見るは哀の時節來れり。雲心鶴態閑情
 骨に入る處去今を冥想すれば、靈音の非、今は是、今の非、靈音の是なるもの多く、
 微に我れ知る所を知り、我知の知らざる所を養ふの徑路を視る、我知はしかく變わ
 れど、眞宰は依然として造化を彰はし。穹蒼は依然として經緯を顯し。天地の眞美
 は油然、我魂交る處に下り。我形開く處に來る。永朝永夕。窓を開けば青山入り。簾
 を捲けば白月窺ふ。嗚呼其知るところの天地の美を把するを得て、未だ知らざるどこ
 るの宇宙の眞を尋ね、庶幾くは無聲聲を聽かん。

(廿六年)

(一) 山茶花下

萩の葉陰に私語るたる鷄群、浴餘の沙に臥して聲なく低く舞ひたる
 蝶を引ひて、行迹失ひたる小犬も、勞れたりけん、日あたりし石甃
 の上に眠れり。短しといへる秋の日脚も自ら長さ心地し、寂黙たる
 村舎の閑晝、獨坐の觀念に便を思ふ、柑果は碧玉の如く垂れて重く、
 楨貫は瓢もて作れる瓔珞の如く層りて美なり、桐の葉の風なきに一
 片二片落ちて、おのづからに畫を爲すも致なきにわらず、數多の果
 花數多の梢、眼に映じつるうちに、はからず我眸を凝らさしめたる
 のは、庭石の傍にたちたる山茶花一株、花の其色は白く、其姿は
 清く、楚々として一種の風情あり。我は唯何とはなくて此花に對し、

花の神は我魂を奪ひ、花の美は我形を化し、我は無意識に花と相向へん。此花山茶か。我は吾身か。將た吾身は花か。我は山茶か。得て識るべからず。唯瞬間我は我をだに現在を覺むざりき。忽然、再び我が在るを識り、花は山茶の名をもて我前に立てり、宛然人の如く我に對せり。我胸底の一味は花に問ひて曰ふ、我は何が爲に此處に生れたる？。花や答へず。定めて是天は偶然に我を生せしめたるにあらじ、眞宰之を司り、造化之を育し、行くべき處に行かしめ、止るべき時に止まらしめ、必ず本心本性なるものありて、適するところあり到るところあり従ふ所あるものならむ、汝を知られりや。花、答へず、青葉に翳されたる其風情は、霜ふり來むを待

つらんが如し。さらば花に問はん、汝が其樹に宿りて、秋の七草に後れ、菊と先後を争ひつゝ、此庭に咲き、山茶の名を負ひて椿にもあらず柑花にもあらず一種の花の色香を成すはそも何が故ぞと思ふか花、答へず、重ねて問はん汝の形態に似たる汝の色香に似たるものにて他の樹に宿りたるを、梅といひ、櫻といひ、桃といひ、梨といひ、牡丹と號し、芍薬と號し、海棠と號し、蘭と稱し、百合と稱し、薔薇と稱し、卯の花朝顔女郎花といひ、芙蓉合歡凌霄蓮といふ、姿致同からず、風情亦異なれども、いづれか花にあらざらん、さうを高士の如き梅は美人の如き櫻と異に、玉垂の小簾の裡に住はるゝ姫に似たる牡丹は、三家村の鄙びたる婦の如き桃と同しからず。蘭菊

の、隱、逸、を、も、て、芙、蓉、合、歡、の、嬌、を、待、つ、は、猶、薔、薇、の、長、へ、に、咲、く、を、も、て、朝、
 顔、の、あ、は、な、き、に、望、む、が、如、く、か、な、ふ、べ、か、ら、ず。是、や、一、幹、の、花、に、し、て、
 千、種、の、名、に、變、り、變、れ、ば、變、る、樹、に、つ、き、て、其、品、其、質、亦、異、な、る、は、そ、
 も、又、恁、麼、の、所、由、か、あ、る。嗚、呼、潔、き、雪、の、如、く、白、き、汝、の、花、瓣、は、梅、と、は、
 化、り、得、ざ、る、か。ゆ、か、し、き、汝、が、香、は、薔、薇、と、は、な、り、能、は、ざ、る、か。同、一、な、
 る、花、な、れ、ば、折、に、ふ、れ、て、だ、に、同、一、な、る、風、情、と、品、質、を、作、る、と、か、な、ふ、
 ま、じ、さ、か。世、は、折、に、ふ、れ、て、汝、が、花、を、梅、に、ま、ち、櫻、の、花、を、汝、に、望、む、こ、
 と、あ、り。汝、が、變、じ、能、は、ざ、る、を、我、は、識、れ、ど、汝、が、變、じ、得、ざ、る、所、由、を、我、
 は、解、し、得、ず。答、へ、よ、花、言、へ、よ、花、此、の、不、思、議、な、る、袋、の、紐、解、か、
 ず、は、我、心、休、せ、じ。胸、底、の、一、味、は、し、か、く、問、ひ、た、れ、ど、も、一、枝、翳、し、た、る

山茶花は嘔嬌の如く、風にも揺れず頷かざりき。我唇は疲れ、我頭
 顛も亦勞し、杳々昏々たる雲の如きもの襲ひ來り、竟に山茶花下に
 臥せり、臥して夢に入りぬ。虚より虚に飛び。空より空に浮びたる
 夢神は、遽然返り來て我は醒めぬ。上に蒼々の天あり、下に混沌の
 地あり、傍に一樹の花、彼は何の他の花にも變せず。夢前に在りし
 山茶花は、亦夢後の山茶花なりけり。

(二) 「麓」の處士 (一)

「行く川の流は絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮ぶう
 たかたのかつ消ぬかつ結びて、久しくとどまることなく」世は常な
 きものぞと觀したる長明の輩。冠蓋の好を知らず、但烟霞の活を信

じ、古道を悲み、江湖散人と號して、悠悠身を羲皇の傲に寄せた
 る陸魯望の徒、在昔はこれあり、今はたあるべしとは思はれじを。
 富士の大岳を東に仰ぎ、雲峯屈曲したる山隈に、村落とは名ばかり
 なる四五の茅屋、散在して一境を開きたる所あり、地勢よりして「麓」
 とは號しける。そこに家居して塵の騒しきを外にし、花果雞犬そが
 友となし、世を安げなる生計をなせる一個の人ありと聞けりしほど
 に、心憎く覺ゆ、一度は訪れて其人の心意たゞき見んと思ひしもの
 から、我里を隔つること凡そ五里、山路磽确使わしくて、瓜果さ
 りけるを、小春日ののどけきにそよのかされ、趙遙ひ出でたり。
 紙、絲産する一二の製造所烟突より、折々鳴らす瀛苗に和して立ち

のぼる烟は、瑠璃色に清く染められたる虚空に、際だちてみなぎれ
 り。殖産興業とて、物質世界の富饒は、此大岳の麓、草の舍多き地
 方にも及ぼされて、幽静の物色は繁華の機械となり來れるを我は視
 たり。途次に數多の野嬢が、紅く白く彩られたる髪の飾し、相拉れ
 てなまめかしき俚歌唄ふて來るに逢ひぬ鐵道もて都門の消息、一瞬
 にして田舎に傳はり來し日より、海松の如き百結の襪纏ふたりし
 人の、漸く彩したる木綿裘被るに至れるを、我は視たり。數里の行
 き行く路にてだに、猶曠昔はと遠かりし都門の繁華の面影見ゆるに、
 我胸底の一念は、そよろに文明の波濤普く及べるを觀たり。
 されど、我歩武の稍仰き、磽确の路を辿り、黄芽白麻を踏むに至り

て、一路は一路より荒れ、一村は一村より寂しく、烟突の黒烟は、疎らなる茅舎の生烟より瓦葺の齊々たりしは、遠樹の芊々となり、折々鳴わたりし流笛は、絶えず響く水車の音となり、なまめかしき嬢の歌ひたりし俚謡は、牟々たる家懐の聲となり、羅紗ゆきたる帽戴きたりし人は、破れたる菅笠かざしたるものと化し、手に曳きたりし荷車は、肩に支へたる擔子と變り、華車に細かりし服佩は、疎野に太き裁著となりぬ。うとくしき人の容貌も、親しましき姿態となれりし如く覺ゆぬ。總じて彼繁華の面影は夢の如く幻の如く消ゆくに痕かたなくなりて、寂黙たる景光は、端りなく冥茫の裡より現はれたり。我來し路の何處が此寂黙と繁華の境界なりしや得知

られず。

唯いやましに我行路は寂靜境に入り、幾らの枯林を過ぎ幾らの寒谷を渡り、路は富士の大山脈が逶迤して數多の邱山百轉したる峽に入れり。是に至りては前に家なく後に人なし、宇宙は默、乾坤は寂、言なき碧空の仰げばいよ、青さを見、影ある枯林の眺ればますます静なるを見る。獨り歩み獨り吟ずる我聲に誘はれて、應ふる山鬼呼ぶ山禽の外には、また響としも謂はんものなく、一步、一步に身は此寂寞に融化せられ、我は今我行きつくべき路をば歩みつゝありやをも、臆げなるまでに、無意となり、情孤に思清く、覺ゆず當中に佇立み、剎那に於ける寂寞生の一味を嘗めたり。

忽焉、驚かされぬ、山貌さんぼうしたる老爺、我前に來れり、「好き天気よ」と言ひて行き過ぐるを呼び、「爺よ、麓村は近さか」と問へば、「麓はあそこぞ」と願ねがもて指示しめし、言ひ捨て往く、野言品やげんしやなくていとも淡あまし。

山峽盡くるところ、平郊出で、また山あり、瘦せたる潤水は、細く路を縫ひ、黄ばみたる林越は、長く崖に添ふ、水の來るところに一縷の烟たなびき、林を隔て、雞聲を聞くまゝに、辿り行きて、やがて茅屋兩三相列び、松樹高く聳たつぬたる邊に出でたり。

近けば、松、百年の風雨に古りて、老幹さかぢ宛然虬龍の天に朝したらんが如し、柯かに纏まとひ編あまれたる女蘿つたの霏ひ靡またる隙ひまより、凝りたる香脂

琥珀の如く見ゆ、西に重々たる峯巒かみを控ぬ、北の方東に傾きて山の低たれたる峽かみより、千秋白雪の玉芙蓉を見せたり、南に長林相接し後なる丘陵に、幾千の蜜柑、幾千の柿樹、枝相摩し梢相交りて植ゑられたり。霜に飽あきたる果實は、千萬顆の珊瑚と黄金を一齊に虚空に散らせる如し。箇中に古りたる茅葺の廈一圍、曲ある衡門に通せられたるが、心憎こぞき生計する處士の家居にてぞわらむ。

傍ほとりに日影の暖さをうけて臥したる、白犬の甚と肥あたる犢の如くなるが、絲の如くひかれたる眼を開きて、徐ろにゆるぎ起ち、我衣裾に添ひて黒みたる鼻あげて見あげたるは、此新しき客を迎むかへんとにや。

白犬に導かれて門を入れば、低き竹垣の疎なるに圍れたる庭いと廣く、そこに若干の雞群棲めり。

花の如き冠を戴き彩紙の如き頸毛を振ひ昂然として長鳴するもの、緑翹日と映じ翠羽地に垂れ細々として相呼伴するもの、人の衣短かに着たらん如く脚だかに打つれつゝ啗々として母雞につきあろくもの、乾沙に臥そべるもの、芥をあさるもの、白さは鶴と見まがひ、立きは鳩かと疑ふ。其聲膠々、其態悠々。すべて彼等は自然の境界に自得して亦此寂に化せられ、穩なる棲居を破りたる我姿を訝しげに仰ぎ見たり。

彼の果實、此雞群に圍繞されつゝ、徂く光陰を送り、來る歲月を迎

ふるの主人は羨ましく心憎きことにぞある。戸に入りたるに迎ふる人影もあらず、猶白犬は我に添ひて立てり、犬よ汝が主はあらずや如何にせし、何處に行かれしと問へど、彼は黙して仰げり。彼がおもて、面に見わたる氣は、正に是、一只在此山中。雲深不知處。

口笛の聲屋後に聞ゆるはどに、白犬は顧ささまに走り去りしが、須臾して返り來し後に隨きて一箇の漢顯はれたり。我は軽く揖して、好事なる我心の卒然此山路を辿りて此處を訪ひたるよしを告げたりければ、渠は微笑に應じて、框を上り一室に招ず。

疊六ひらばかり敷かれ、物清げにとよのへられたる室に招せられて語る。

渠は初め想像したりける童顔白髪の老翁にはあらで、白面秀眉の黒頭郎なりけり。瘦せたる風骨鶴の標あり悠なる容儀松の品あり。寛帖々たる所はなけれども、高僧々たる氣自らあり。しかも冷然として氷稜たるにはあらで、所謂清相の裡温氣を藏し、金天爽颯のところに春水一味ふくまれたるは自ら眉宇降彩の間に知られたり。

「我は子がかゝる山谷の深さに棲みて、かゝる生計を爲すの風流超脱なるをゆかしみ、將た子が所謂材を幽藪に懷き頰を重巖に藏するを惜む、我が未だ聞かざりし子が所思ありてかゝる境界にはあるか」
我は語次に問ひぬ。

「我は子がかゝる問をもたらしめて、我如き山人の所思を尋ねたるを禮

す、されば子が此に至れりしは空谷の梵音にして我喜びて相迎ふ。我此山谷に棲遲して我生計をなすもの、もとより風流超脱を學ばんとにはあらず、さては子の言ふ頰を藏し材を懷くことは我には遙か隔てり、唯吾頭顱は我をして此境界に在らしむ、何の他の異なる所思あらむ、」彼は平然として答ふ。

(二)

我更に問ふ「子が所謂頭顱とは何ぞや。肉か、靈か、實か、空か、將た何者ぞ」

彼「我未だ頭顱の肉か、靈か、形か、影か、罔兩かを知らず、翩然大荒に浮游する陽炎の凝りて成りしか顆々 珠の如き葉上の白露が